井尻Ｂ遺跡23

―第37次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一二一八集

二〇一四

福岡市教育委員会

井尻Ｂ遺跡 23

― 第 37 次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1218集

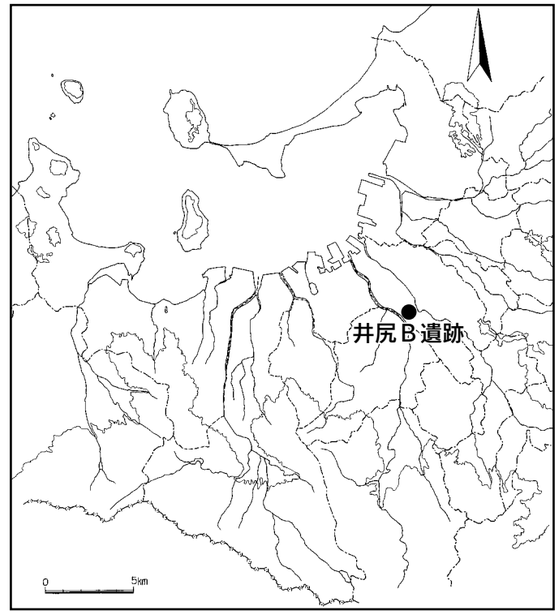
２０１４

福岡市教育委員会

井尻Ｂ遺跡 23

― 第37次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1218集



遺跡略号　　**調査番号**

ＩＧＢ－３７　　１２０３

２０１４

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・朝鮮半島と一衣帯水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。なかでも旧那珂郡には、旧石器時代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、共同住宅建築に伴う井尻B遺跡第37次発掘調査について報告するものです。この度の調査では奈良時代の溝を検出するとともに、福岡市内では非常に希少な旧石器時代の遺物が良好な状態で多数出土しました。これらは地域の歴史の解明、ひいては九州における旧石器時代研究のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の一資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業主様をはじめとする関係者の皆様には発掘調査から本書の作成に至るまで深いご理解と多くのご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成26年３月24日

福岡市教育委員会

教育長　　酒井　龍彦

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が共同住宅建築に伴い、福岡市南区井尻4丁目174番1、174番2において実施した発掘調査である井尻B遺跡第37次発掘調査の報告書である。
2．本書に掲載した遺構実測図は阿部泰之が作成した。
3．本書に掲載した遺物実測図は第2章を平川敬治が、第3章を山口譲治・山口朱美が作成した。
4．本書に掲載した挿図の製図は阿部がおこなった。
5．本書に掲載した写真は阿部が撮影した。
6．本書で用いた方位は特に断りなき限りすべて磁北で、真北から6°30′西偏する。
7．遺構の呼称は溝をSD、ピットをSPと略称する。遺構番号は発掘調査の際、現場で任意に振った通し番号を特に断りなき限りそのまま用いる。
8．本書にかかわる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
9．本書の執筆は第3章第2・第3項・第4項を萩原博文が、それ以外および編集を阿部がおこなった。
10. 本書掲載の埋蔵文化財包蔵地の範囲は平成6年3月現在の推定線であり、現在は変更されている可能性がある。詳細は福岡市文化財部埋蔵文化財審査課に確認されたい。
11. 本書で報告する発掘調査の細目は以下の通りである。

遺跡調査番号	１２０３	遺跡略号	ＩＧＢ－37	
所在地	福岡市南区井尻4丁目174番1、174番2		分布地図番号	０２５ 井尻
開発面積	1,354.66㎡		調査面積	607.8㎡
調査期間	平成24年4月17日～平成24年7月12日		事前審査番号	23－2－823

本　文　目　次

はじめに …… 1
　１．調査に至る経緯
　２．調査組織
第１章　位置と環境 …… 2
第２章　調査の記録 …… 7
　１．調査概要
　２．遺構と遺物
第３章　旧石器時代遺物について …… 13
　１．調査概要
　２．旧石器時代遺物の分布について
　３．旧石器時代遺物各説
　４．まとめ

挿　図　目　次

Fig.1　井尻Ｂ遺跡と周辺の主な遺跡（1/25,000） …… 2
Fig.2　調査区位置図（1/4,000） …… 4
Fig.3　調査区位置図（1/1,000） …… 5
Fig.4　調査区全体図（1/200） …… 6
Fig.5　調査区南壁土層断面実測図（1/60） …… 7
Fig.6　SD18実測図（1/60） …… 8
Fig.7　SD18出土須恵器・土師器実測図（1/3） …… 9
Fig.8　SD18出土瓦類実測図（1/3） …… 10
Fig.9　SD18検出時およびピット出土瓦類実測図（1/3） …… 11
Fig.10　SD15・ＳＤ33実測図（1/60・1/30） …… 12
Fig.11　ピット出土遺物実測図（1/3） …… 13
Fig.12　旧石器時代遺物出土状況実測図（1/100） …… 14
Fig.13　Ａ群遺物出土状況実測図（1/60） …… 17
Fig.14　Ｂ群遺物出土状況実測図（1/60） …… 18
Fig.15　Ｃ群遺物出土状況実測図（1/60） …… 18
Fig.16　出土旧石器実測図（縮尺＝実物大）　① …… 21

Fig.17　出土旧石器実測図（縮尺＝実物大）　②…… 24
Fig.18　出土旧石器実測図（縮尺＝実物大）　③…… 27
Fig.19　出土旧石器実測図（縮尺＝実物大）　④…… 28
Fig.20　出土旧石器実測図（縮尺＝磨石1／2、他は実物大）　⑤…… 30
Fig.21　出土旧石器実測図（縮尺＝実物大）　⑥…… 31
Fig.22　Ａ・Ｂ・Ｃ群の時間的関係…… 34
Fig.23　長崎県入口遺跡Ａ地点694b区遺物分布図（萩原2004a）…… 35
Fig.24　長崎県百花台東遺跡の遺物分布と接合関係（萩原2004a、松藤編1994をもとに作成）…… 37
Fig.25　井尻Ｂ遺跡第37次Ａ群の遺物分布状況…… 39

図　版　目　次

PL.１　調査区全景（北より）
PL.２　調査区南壁土層①（北より）
PL.３　調査区南壁土層②（北より）
PL.４　SD18（北より）
PL.５　SD18土層（南より）
PL.６　SD15（西より）
PL.７　SD33（南より）
PL.８　SP11（南より）
PL.９　SP13（北より）
PL.10　出土遺物①（Fig.7-8）
PL.11　出土遺物②（Fig.7-9）
PL.12　出土遺物③（Fig.12-4）

はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市南区井尻4丁目174番1・174番2（敷地面積1,354.66㎡）における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成23年12月5日付で受理した（事前審査番号：23-2-823）。

これを受けて文化財部埋蔵文化財第1課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である井尻Ｂ遺跡に含まれていること、すでに平成7年8月に確認調査が実施され現地表面下60cmで遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を重ねた。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、共同住宅本体部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成24年4月9日付で株式会社タイヘイを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年4月17日から発掘調査を、翌平成25年度に資料整理・報告書作成をおこなうこととなった。

２．調査の組織

調査委託：株式会社タイヘイ
調査主体：福岡市教育委員会
調査総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課長　宮井善朗
調査第１係長　常松幹雄
調査庶務：埋蔵文化財審査課　管理係　川村啓子
事前審査：埋蔵文化財審査課事前審査係長　加藤良彦
事前審査係主任文化財主事　佐藤一郎
事前審査係文化財主事　木下博文
森本幹彦
調査担当：埋蔵文化財調査課調査第1係文化財主事　阿部泰之

なお文化財部は、組織改編のため平成24年４月１日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

本書掲載の埋蔵文化財包蔵地の範囲は平成6年3月現在の推定線であり、現在は変更されている可能性があります。詳細は福岡市文化財部埋蔵文化財審査課にてご確認ください。

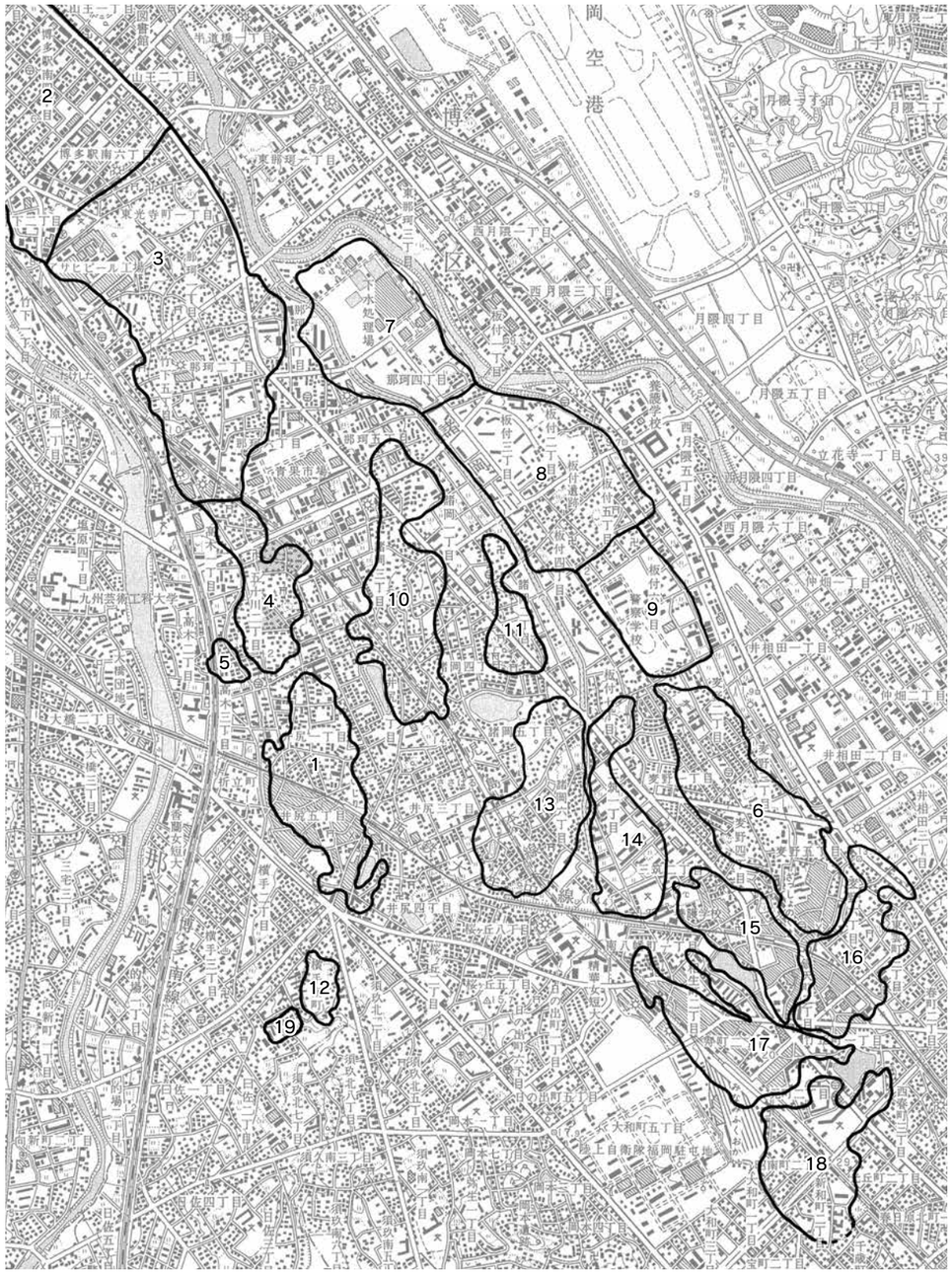


Fig. 1　井尻Ｂ遺跡と周辺の主な遺跡（1/25,000）

1．井尻Ｂ遺跡　2．比恵遺跡群　3．那珂遺跡群　4．五十川遺跡　5．井尻Ａ遺跡　6．麦野Ａ遺跡　7．那珂君休遺跡　8．板付遺跡　9．高畑遺跡　10．諸岡Ａ遺跡　11．諸岡Ｂ遺跡　12．寺島遺跡　13．笹原遺跡　14．三筑遺跡　15．麦野Ｂ遺跡　16．麦野Ｃ遺跡　17．南八幡遺跡　18．雑餉隈遺跡　19．笠抜遺跡

第１章　位置と環境

現在の福岡市の中心的位置を占める福岡平野は、背振山系から発した那珂川と牛頸・四王寺山地から発した御笠川とによって形成された沖積平野である。現在は市街地化が進み旧状はほとんど窺えないが、もとは広大な農村地帯であった。この平野はその中央部に春日方面から延びる低丘陵「須玖丘陵」が位置し、那珂川と御笠川の流域はこれによって画されている。本丘陵は長年の浸食作用によって多くの谷が複雑に入り組み、多数の独立丘に分かれている。いずれの流域の平野にあってもその低丘陵上には多くの遺跡が存在し、井尻B遺跡は福岡市域の南端部、那珂川中流域右岸の須玖丘陵北端部にある。今回報告する第37次調査地は遺跡の乗る丘陵が南北に狭長となる南端部に位置する。

井尻B遺跡は、旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物が検出されている複合遺跡である。文献における初見は福岡藩士青柳種信が著した『筑前国風土記拾遺』で、「大塚」「鉾の鎔範」「古瓦」と、古墳の存在や鋳型・瓦の出土を伝えている。明治時代には九州帝国大学医学部にて教鞭を執った中山平次郎によって実地踏査がなされ、青柳種信の記述に詳細な考証を加えた。ここでは、既往の調査例から井尻B遺跡の、主に旧石器時代から古代に至るまでの状況を追っていきたい。

旧石器時代は、井尻B遺跡の南側と北東縁辺部で遺物が出土している。しかし明瞭な文化層をもって出土した例は、調査地から道路を挟んで北西側で実施された第2次調査がほとんど唯一の例であった。遺物はいわゆるクロボク状の黒褐色土とその下層、新期ローム上部の境界付近にて出土する。細石刃を中心とし、少数の台形石器・ナイフ形石器・彫器・削器が含まれる。今次調査において細石刃が確認されなかったのとは対照的である。

縄文時代は遺構・遺物とも僅少で、遺構埋土に混入する形で石鏃・石斧がわずかに出土する状況である。

弥生時代に入ると井尻Ｂ遺跡ではほぼ全域で遺構・遺物が検出される。前期末から中期初頭にかけて土壙や貯蔵穴がみられるようになり、土壙墓や汲田式から須玖式で構成される甕棺墓が遺跡北部と南東部の丘陵縁辺部につくられる。その後明確に時期を特定できる遺構は減少するが、後期中葉から終末にかけて住居址・井戸・掘立柱建物が急増し、丘陵上である程度以上の面積が確保できる箇所はほぼすべて開発されつくしたものと推測される。これらの遺構からは銅鏃・小銅鐸といった金属器や鋳型や銅塊が付着する土器など鋳造関連遺物が出土し、本遺跡でも金属器の製作がなされていた可能性を示唆している。第17次調査では台地北西縁辺部に水路とみられる大溝が構築され、古墳時代前期には埋没している状況である。

古墳時代初頭から前期にかけても前代に引き続き集落が営まれる状況が見て取れるが、中期以降は遺構が大幅に減少する。第2次・5次調査では5世紀後半とされる円墳の周溝や古墳時代の埋葬遺構が検出され、当該期は墓域として利用されたと推測される。周構内や近接する第28次調査からは家形埴輪片が出土している。

古代に至ると、遺跡北部の高所に大型掘立柱建物と溝で構成される官衙的施設がつくられる。第3次調査で7世紀後半から8世紀前半とされる瓦がまとまって出土したのを嚆矢に、17次調査では正方位の区画溝と掘立柱建物跡、礎石の可能性がある石材、「評」名刻書瓦や「寺」字刻書須恵器が出土した。これは飛鳥時代から奈良時代にかけてのある時期、大規模な寺院が存在したことを示す。遺跡南部では今次調査で溝から当該期の瓦が出土し、古代の遺構群が遺跡南部まで広がる可能性を示唆している。

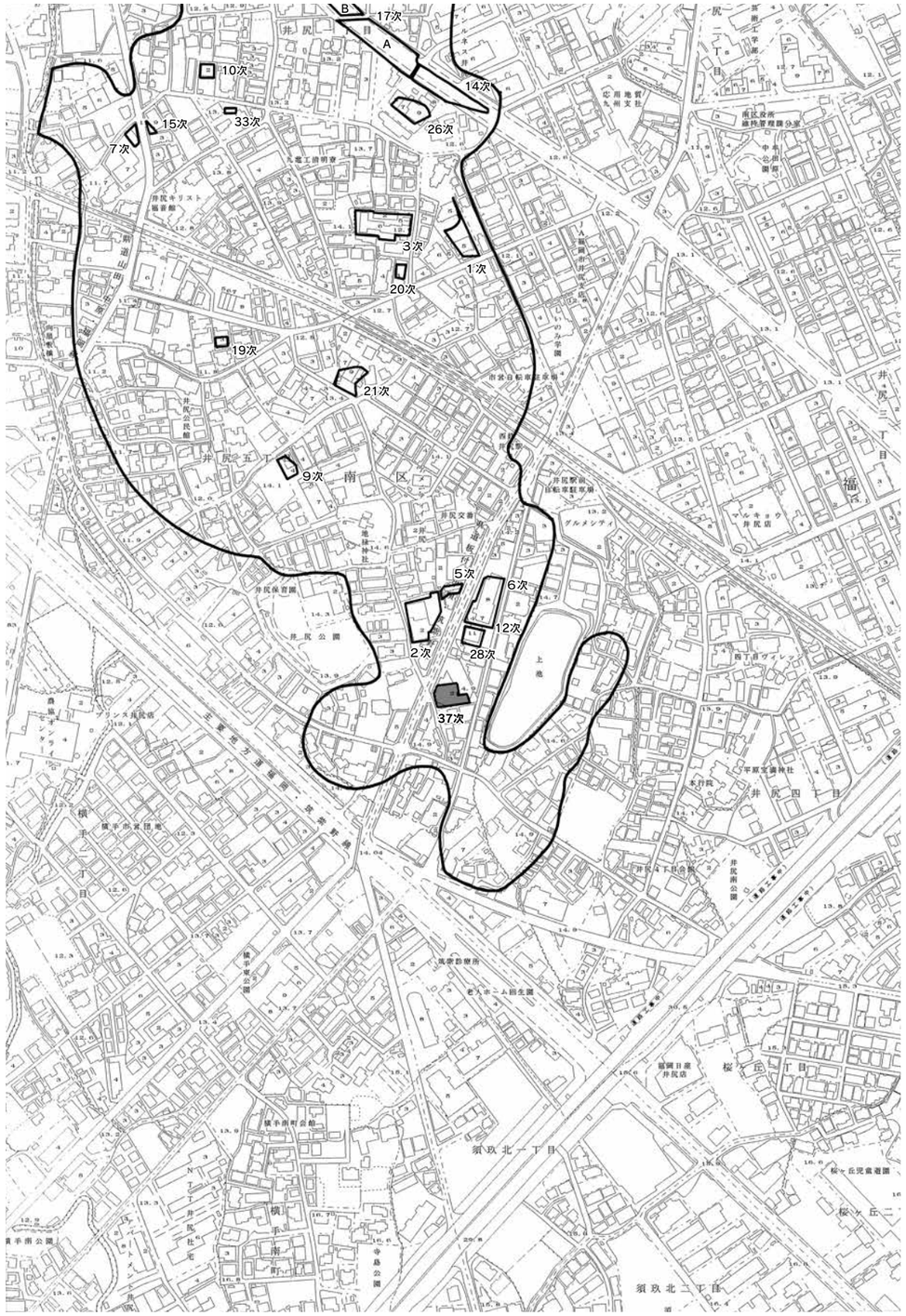


Fig. 2　調査区位置図（1/4,000）

Fig. 3　調査区位置図（1/1,000）

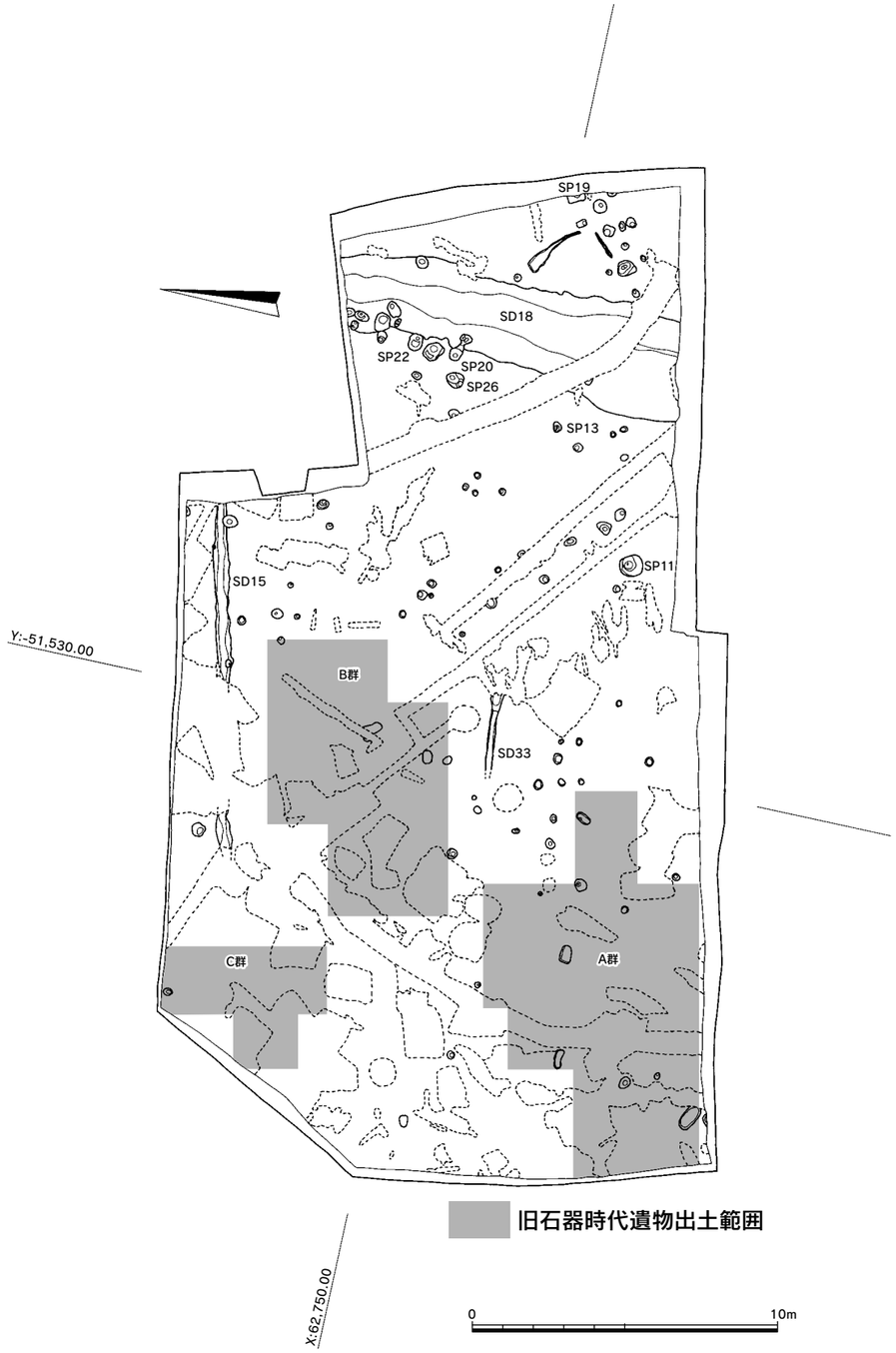


Fig. 4　調査区全体図（1/200）

第２章　調査の記録

１．調査の概要

今回の調査地は遺跡の南部、丘陵尾根線の東斜面にあたり、現況は造成された宅地である。

今回の調査で検出された遺構は、溝3条・ピットである。溝のうち調査区東端で検出されたものは須恵器・瓦片を含み7世紀末頃に埋没が始まったと推測される。ほかの2条は浅く規模も小さく遺物の出土もなく、時期等詳細は不明。ピットは大半が木の根痕とみられる。

特筆すべき遺物として旧石器時代遺物が挙げられる。遺構検出をおこなっている際に黒曜石・安山岩系石材のチップ・石核等が点々と出土し、遺構面のロームが旧石器時代遺物を含む包含層であることがわかった。遺構検出時において遺物が出土する範囲は調査区西側の丘陵尾根に近い部分であったが、範囲を絞り込むため全景写真撮影・遺構図作成後調査区に5mおきに2m×2mのグリッドを設定、1点以上の遺物が出土したグリッドを中心に拡張する手法をとった。よって本調査区内に今回検出したユニット以外の遺物集中部はないものと判断する。

今回の調査ではロームの上に黒色のいわゆるクロボク層の残存が認められ、過去の削平が少なかったことがわかる。加えて調査地北側で実施された発掘調査で検出されている弥生後期～古墳前期の住居址が検出されないため、集落の南限は本調査区に達していず、結果として旧石器時代遺物が良好に遺存したのであろう。

２．遺構と遺物

①溝（SD）

SD18（Fig.6）

調査区東縁辺部を南北に貫流する溝である。位置は遺跡が乗る低丘陵東斜面の傾斜変換線上にある。方位は座標南北軸におおむね平行し、幅は広いところで約3.5m、狭いところで約2.4mを測り、平面プランは出入りが多い。北端付近の上端部にピットが複数検出されたが、平面・断面とも不整で木の根痕と考えられる。深さは深いところで30cm、浅いところで15cmを測る。底面は概ねフラットで凹凸は少ない。断面図をFig.5に示す。断面形は浅く皿状を呈し、埋土は黒褐色土～暗褐色土にて構成される。堆積状況は均一で地山のブロック等の含有量が少なく、下部には地山ロームとの漸移層が形成されており自然堆積で、掘りなおしの痕跡は観察できない。砂礫で構成される層が観察されず、少なくとも最終的に埋没する段階では溝内に流水はなく、乾燥と滞水をくりかえすような状況で時間をかけて埋没したも

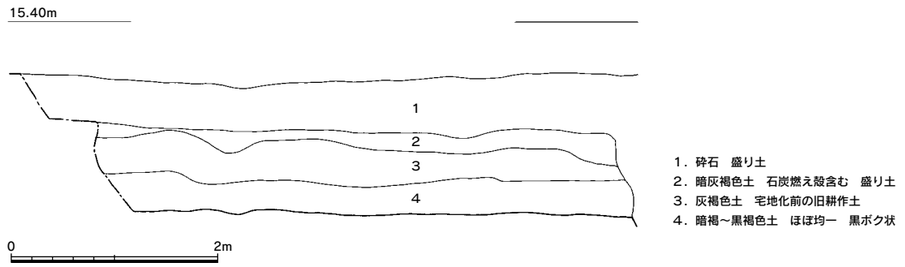


Fig. 5　調査区南壁土層断面実測図（1/60）

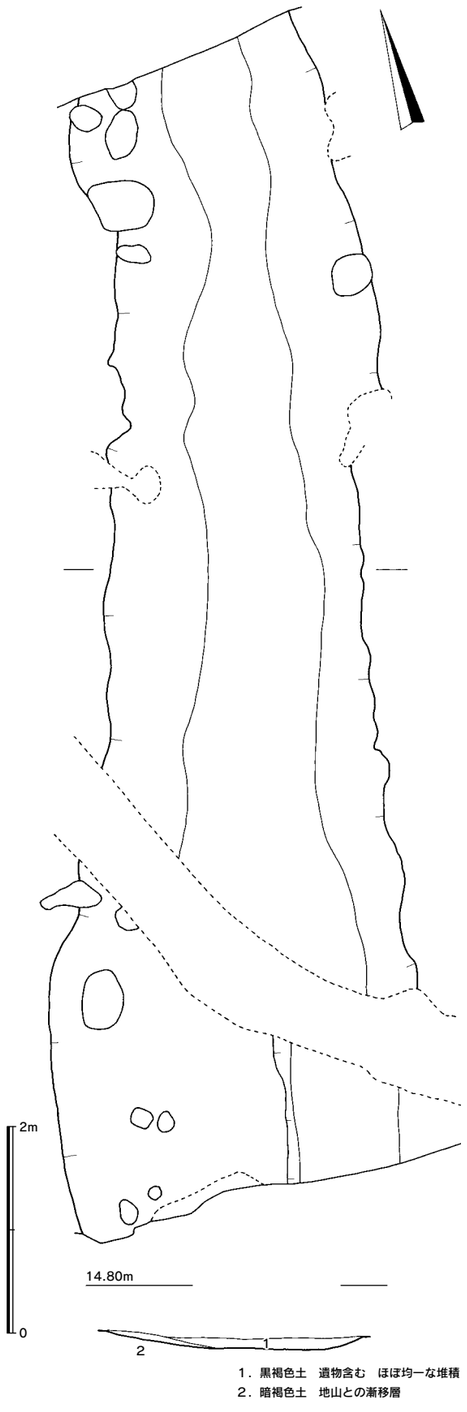


Fig. 6　SD18実測図（1/60）

のと推測される。

出土遺物（Fig.7・8・9）

Fig.5に示す断面図の第1層から大半の遺物が出土した。8世紀代の須恵器・土師器が主体で瓦類を一定量含んでいる。浅いためか個体で投げ込まれたような出土状況を示す遺物は出土せず、何れの遺物も小片である。Fig.7には須恵器・土師器、Fig.8には瓦類、Fig.9にはSD18検出時に出土した瓦類を図示したもの。

（Fig.7）1から10は須恵器である。

1から4は坏で、以下その残存状態を報告する。1は口縁部が1/6残存する小片で残存高3.0cmを測り、口径11.6cmに復元される。2は口縁部が1/8残存する小片で残存高2.8cmを測り、口径12.0cmに復元される。3は口縁部が1/10残存する小片で残存高2.8cmを測り、口径13.0cmに復元される。4は口縁部が1/8程度残存する小片で残存高3.6cmを測る。口径16.4cmに復元され、今回出土した須恵器坏の中では大型品である。上記須恵器は何れも胎土は精良堅致で焼成は良好である。

5から9は高台付きの坏である。5は底部が1/8程度残存する小片で、内底面に不定方向のナデを有する。残存高1.4cmを測り、底径10.2cmに復元される。外面は淡橙色を呈し焼成はやや不良である。6は底部が1/3残存する小片で、残存高1.5cmを測り、底径10.4cmに復元される。7は口縁部まで接合できたが、全体で1/8個体程度である。器高4.1cmを測り、口径12.0cm、底径8.4cmに復元される。内底面に不定方向のナデを有する。高台畳付に粘土粒が付着し、重ね焼きのために付けられたものの可能性がある。8は口縁部まで接合できたが、全体で1/4個体程度である。器高4.1cmを測り、口径13.2cm、底径9.0cmに復元される。内底面に不定方向のナデを有する。器壁・断面とも灰白色を呈し、焼成はやや不良である。6から8の胎土は精良堅致で焼成は良好である。

10は瓶ないし壺である。蹤の可能性もあるがこれだけでは峻別しがたい。胴部の小片で、残存高6.1cmを測り、胴部最大径17.0cmに復元される。胎土は精良堅致で焼成は良好である。

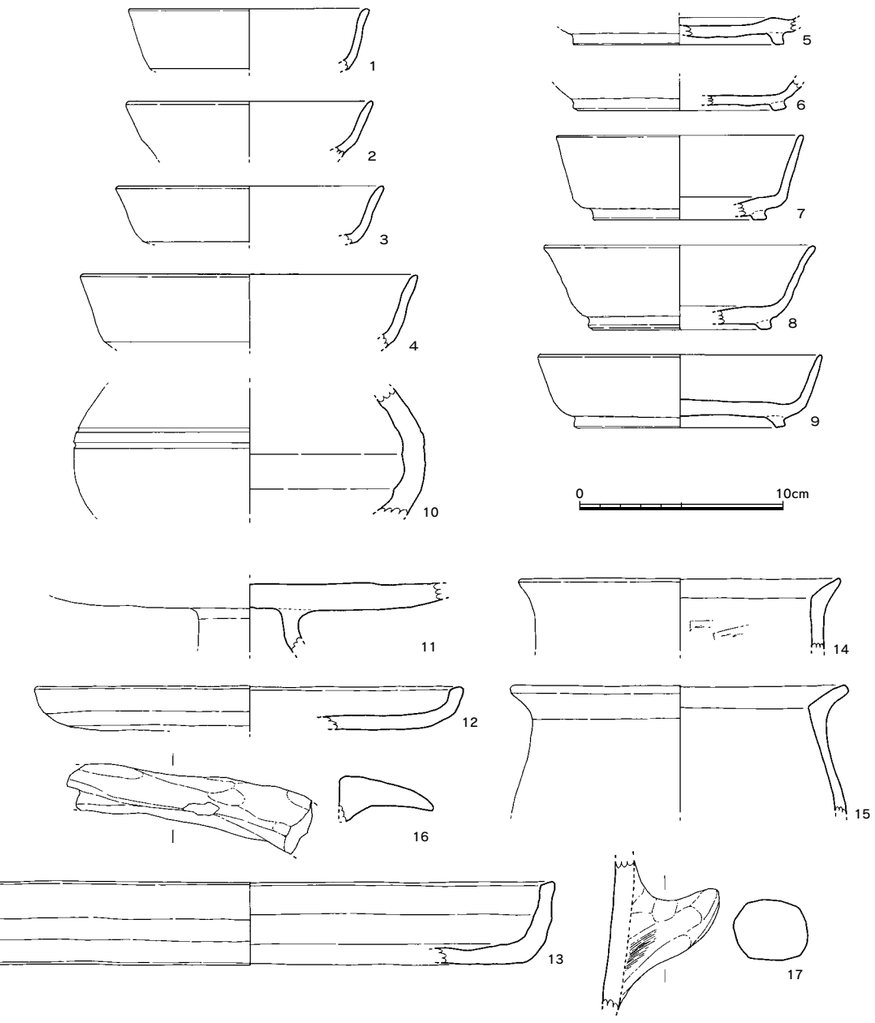


Fig. 7　SD18出土須恵器・土師器実測図（1/3）

11から17は土師器である。

11・12は高杯である。11は坏部底面から脚部にかけての破片で、残存高3.4cmを測る。坏部は厚いところで器厚1.4cmを測り重量がある。器壁は摩滅し調整は不明瞭である。12は坏部の小片で、口縁部が1/6程度残存している。残存高2.1cmを測り、口径20.8cmに復元される。器壁は摩滅するが、外底面に回転ヘラケズリ痕が観察できる。

13は皿ないし盤である。口縁部を1/10残す小片で、残存高4.1cmを測り、口径29.6cmに復元される大型品である。器壁は摩滅するが、外底面に不定方向のヘラケズリ痕が観察できる。

14・15は甕である。14は口縁部が1/8残存する小片で、残存高3.4cmを測り、口径15.6cmに復元される。器壁は摩滅するが胴部内面には右上がりのヘラケズリ痕が観察される。15は口縁部が1/4残存する小片

Fig. 8　SD18出土瓦類実測図（1/3）

で、残存高6.2cmを測り、口径16.4cmに復元される。器壁は摩滅し調整は不明瞭である。

16は移動式竈の庇部である。残存長11.9cmを測る破片で、庇の幅は4.6cmを測る。器壁は摩滅して調整は不明瞭だが、上面はナデ、仮面は不定方向のヘラケズリが観察される。

17は把手である。甑か。牛角状を呈しユビオサエにて成形される。一部赤褐色に変色しており被熱した可能性がある。器壁は摩滅し調整は不明瞭である。

何れの土師器も胎土は精良で焼成は良好である。

（Fig.8）SD18から出土した瓦類のうち実測可能なものを図示した。

1は平瓦である。凹面は斜め方向のヘラケズリで調整しており、布目痕はわずかに認められる程度である。凸面は丁寧なナデによって調整され、平滑に仕上がっている。胎土は精良で含まれる砂粒は少ないが、焼成はやや不良で器壁は灰白色から淡橙色を呈する。

2から5は丸瓦である。凹面は明瞭な布目痕が残り、模骨痕が認められる。凸面は木板状の工具による丁寧なナデによって調整され、端部とは明瞭な稜をもって平滑に仕上がっている。胎土は精良で含まれる砂粒は少なく、焼成は良好で硬質な仕上がりである。3は凹面は斜め方向のナデで調整しており布目

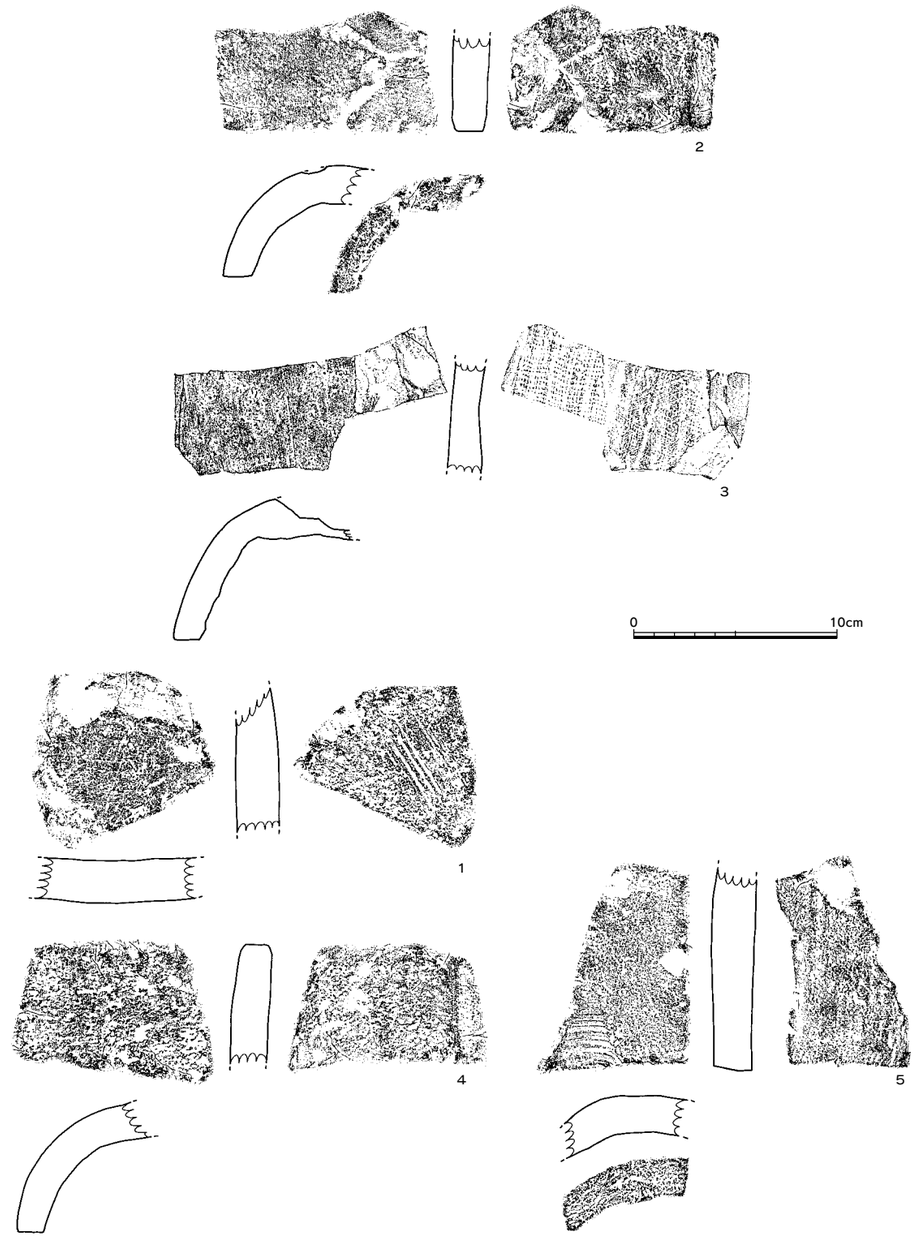
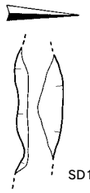


Fig. 9　SD18検出時およびピット出土瓦類実測図（1/3）

痕は不明瞭だが、横方向に模骨を緊結する縄の痕跡が認められる。凸面は平滑に仕上がっており、上下方向のヘラケズリ痕が一部に認められる。胎土は精良で含まれる砂粒は少ないが、焼成はやや不良で器壁は灰白色から淡橙色を呈する。4は凹面は明瞭な布目痕が残り、模骨痕が認められる。凸面は木板状



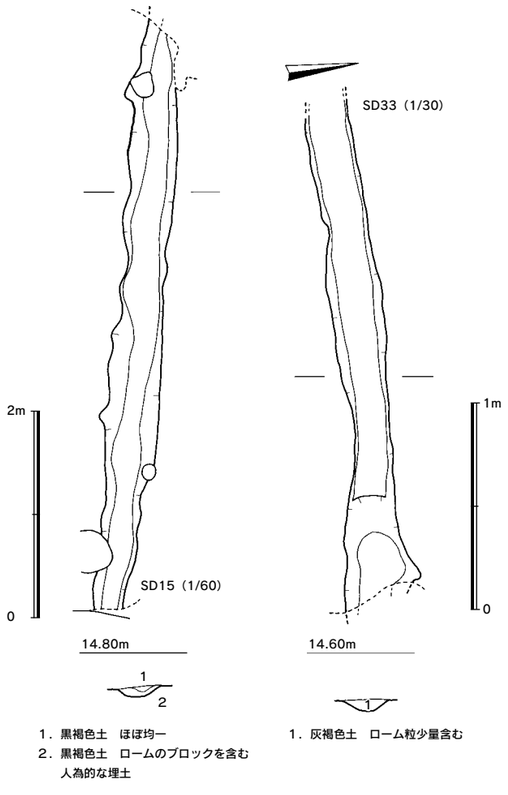


Fig. 10　SD15・SD33実測図（1/60・1/30）

の工具による丁寧なナデによって調整され、端部とは明瞭な稜をもって平滑に仕上がっている。

胎土は精良で含まれる砂粒は少なく、焼成は良好で硬質な仕上がりである。

5は小片で凹面は布目痕が明瞭に残存し、模骨の痕跡は不明瞭である。凸面横方向のナデによっては平滑に仕上がっており、端面には波状の皺が観察でき、模骨に巻いた状態から切り離す際にできたものと思われる。胎土は精良だが、焼成はやや不良で器壁は褐味を帯び、灰白色から淡橙色を呈する。

（Fig.9）SD18を検出した際にその上面から出土した瓦類のうち実測可能なものを図示した。何れの個体も焼成は不良で土師質を呈する。器壁は摩滅し調整も不明瞭である。

1は平瓦である。2・4・5は丸瓦である。2は小片で、凹面に布目痕がわずかに残る。端面の一部が橙色を呈し二次的に被熱している。4は上端部の小片。5は残存長9.8cm・幅6.0cmを測る小片である。

ＳＤ15（Fig.10・ＰＬ・2-3）

調査区北端部にて検出した東西方向に伸びる溝である。幅30～60cm・深さ15cm・延長11.2mを測り、西端は撹乱に切られる。土層断面をFig.11に示す。埋土は黒褐色土で下層にロームをブロック状に含み、人為的に埋めている可能性がある。

遺物は出土しなかった。

ＳＤ33（Fig.10・ＰＬ・3-1）

調査区北端部にて検出した東西方向に伸びる溝である。幅15～30cm・深さ10cm・延長2.5mを測り、東端は撹乱に切られる。土層断面をFig.11に示す。埋土は灰褐色土でロームをブロック状に含み、人為的に埋めている可能性がある。

遺物は出土しなかった。

ピット出土の遺物（Fig.9・11）

（Fig.9）3は丸瓦である。凹面は明瞭な布目痕が残り、一部ナデられ模骨痕が認められる。凸面は丁寧なナデによって調整され、端部とは明瞭な稜をもって平滑に仕上がっている。

（Fig.11）1は甕である。SP11出土。弥生終末～古墳初頭頃か。2・3は土師器甕である。何れも底

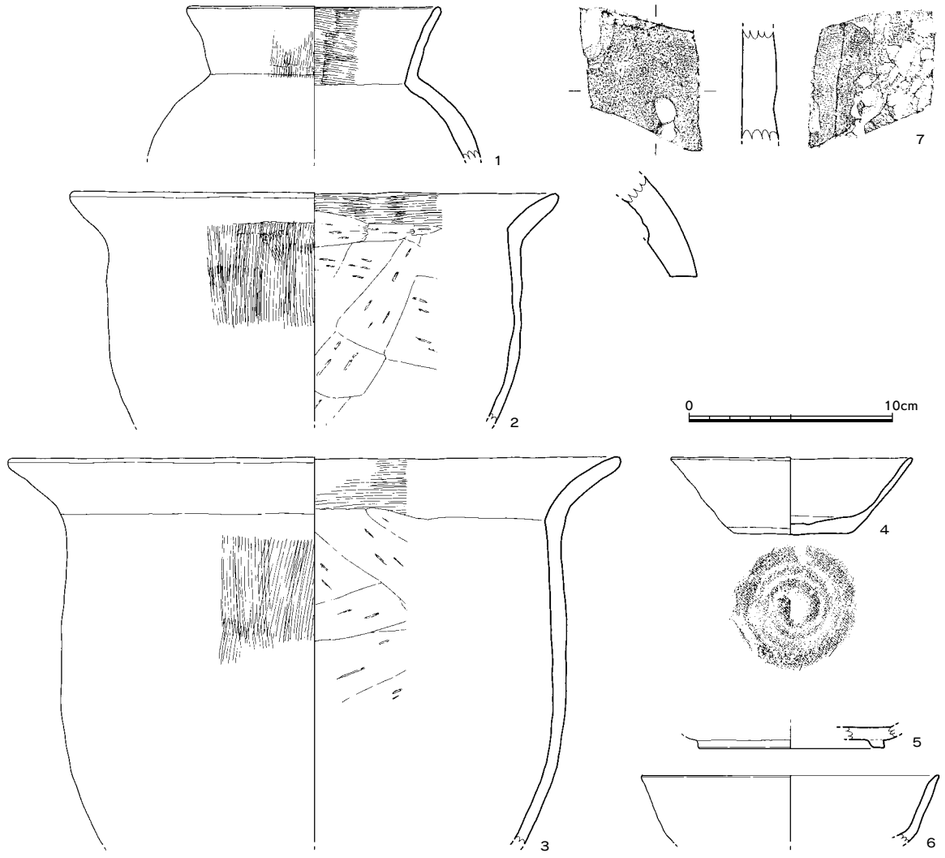


Fig.11　ピット出土遺物実測図（1/3）

部を欠く小片。2はSP19出土。胴部下半に炭化物が付着する。3はSP26出土。4は土師器坏である。SP13出土。PL・3-3に出土状況の写真を示す。

5・6は須恵器坏である。7は丸瓦である。SP20出土。残存長5.3cmを測る小片で、凹面は明瞭な布目痕が残るが大部分剥落する。凸面は丁寧なナデによって調整され、端部とは明瞭な稜をもって平滑に仕上がっている。胎土は精良、焼成は良好で硬質な仕上がりである。

第３章　旧石器時代遺物について

１．調査概要

今回の調査では、旧石器時代に属する石器の良好な包含層を検出した。調査概要に記したとおり遺構検出時から地山ローム上面より黒曜石の剥片・チップが出土し、撹乱の埋土中からも出土した。よって全景写真撮影後、調査区全体に5m×5mのグリッドを設定、5mおきに2m×2mのグリッドをさらに設定

しロームを掘り下げて試掘し、石器が分布する範囲を絞り込んだ。その結果、大きく３つのまとまりを検出することができた。遺物が含まれるのは遺構検出面の暗褐色ロームとその下層、明褐色ロームの上部である。境界は漸移的で明瞭でない。土質は軟質で、移植ゴテが抵抗なく入る。特定の層にのみ遺物が含まれるわけではなかったため、遺物が出土しなくなるまでロームを掘り下げてすべての遺物を採集することにつとめた。

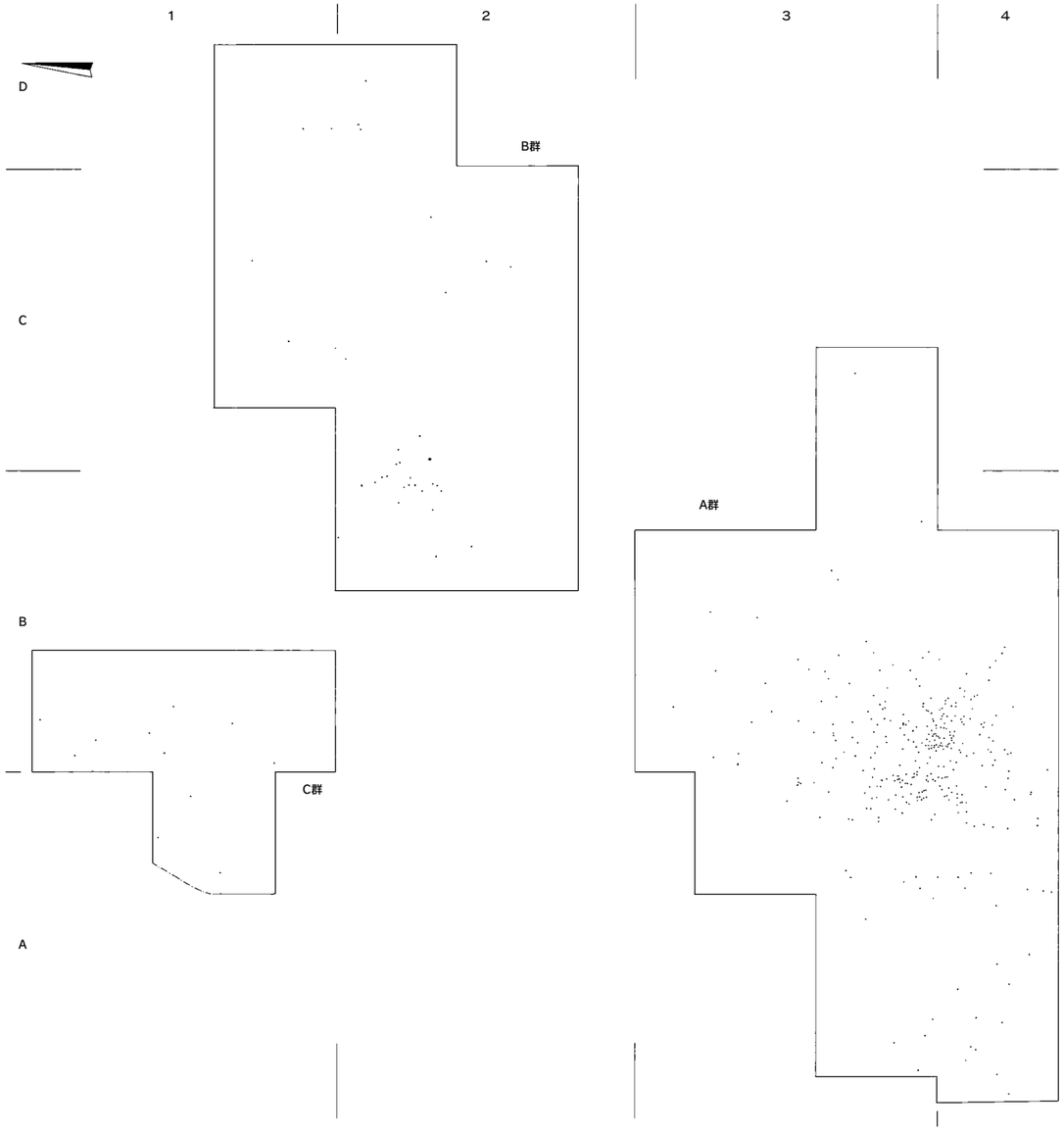


Fig. 12　旧石器時代遺物出土状況実測図（1/100）

２．旧石器時代遺物の分布について

（１）　遺物分布の概要

井尻Ｂ遺跡第37次調査においては、旧石器時代に属する三ヶ所の遺物集中部が認められた。調査区の南から、Ａ，Ｂ，Ｃ群と呼称する。

Ａ群は、Ａ－3･4グリッド、Ｂ－3･4グリッドの境界付近に極めて濃密に分布している。出土数の大半は、本地点の出土である。密集部の直径は3.5～4m程度であるが、その周辺に疎らな分布が認められる。Ｂ群は、Ｂ－2グリッドとＣ－2グリッドの境界付近に、直径2m弱の比較的濃密な分布が認められる。さらに、Ｄ－2グリッドにかけて疎らに分布している。Ｃ群は、Ａ－1、Ｂ－1グリッドに疎らに認められ、出土数も少ない。

各遺物集中部は出土石器の形態に違いが認められ、使用された時期が異なる可能性がある。原の辻型台形石器と百花台型台形石器などが認められ、ＡＴ降灰後のナイフ形石器文化中期から終末期に及ぶと考えられる。

（２）　Ａ群

遺物集中部から多数の石器が検出されているが、その多くは原の辻型台形石器に関するものである。原の辻型台形石器をはじめ、その素材製作に係わる石核や剥片、石器製作時に生じた特徴的な砕片が発掘されている。この小面積の空間で、原の辻型台形石器に関する一連の行動が行われていたのである。砕片の一部には微細な剥離あるいは使用痕が認められ、石器として使用していたと思われる。このような砕片は、原の辻型台形石器を共伴する石器群に特徴的に認められる。

井尻Ｂ遺跡群において原の辻型台形石器関連資料は、本調査区に近い第6次・12次調査において確認されている（福岡市教育委員会2000）。原の辻型台形石器、微細剥離痕ある剥片、石核の3点のみであるが、本地点資料よりも典型例に近い形態である。

Ａ群は456点の石器が検出されているが、その多くは中核をなす集中部において発掘されている。その中には、原の辻型台形石器関連資料とは異なる石器群も認められる。その一つは、石刃あるいは縦長剥片製の二側辺加工・片側辺加工・端部加工ナイフ形石器である。主にＢ－3グリッドの石器密集部の外れに分布し、石器垂直分布の比較的上位のものが多く、原の辻型台形石器を主体とする石器群より新期に位置付けられる可能性がある。二種類のやや幅広縦長剥片石核、縦長剥片も同一のものである可能性が高い。これらはＢ－3グリッドの一定の範囲に認められ、原の辻型台形石器関連資料の密集部とは一線を画すことが出来るので、一括性の高い別の石器群と考えた方が良いように思える。原の辻型以外の台形石器も認められ、この他にも別の石器群が存在している可能性がある。

Ａ群は、石器素材生産、石器製作を中心とする石器群である。削器（コンケイブ・スクレイパー）の存在から、道具製作も行っていたのだろう。だが分布域の外れから磨石が検出されており、礫群や焼土は認められないが日常生活を送っていた場所である可能性も高い。

異なる時期の石器群の重複は第二次調査においても認められ、ナイフ形石器群と細石刃石器群が共伴している（福岡市教育委員会1988）。このような事例は、北部九州において一般的である。堆積層の薄い北部九州は、一括性の強い石器密集部が他地域に比べ少なく、重複する事例が多い。

しかし、原の辻型石器群の石器組成は明らかにされたとは言い難く、さらに詳しい検討が必要であろう。特に、ナイフ形石器との共伴関係に不明な点が多い。各遺跡で、ナイフ形石器の形態的特徴が異なるのである。

（3）　B群

石器集中部と、その周辺の石器群で構成される。集中部では、百型台花台形石器、小形の縦長剥片石核、不定形やや大型の縦長剥片を素材とする削器、折断された小石刃の頭部などが検出されている。これらは、いずれもナイフ形石器文化最終末に位置付けられる、百型台花台形石器を主体とする石器群の構成要素である（萩原2006）。B群の出土点数は47点と多くはないが、石器素材生産・定形石器製作が行われ、削器の存在から道具の製作が行われていた可能性もある。いずれにせよ、一括性の極めて高い石器群と言える。

周辺部では、安山岩製石核、小形短形ナイフ形石器、縦長剥片などが検出されている。この他出土地点は明らかでないが、ペン先状の小形ナイフ形石器が認められる。これらと集中部との関係は明らかでない。短形ナイフ形石器のように共伴の可能性のあるものあるが、石器組成などに違いがあり、異なる時期に形成された可能性がある。

（4）　C群

少数の石器が極めて疎らに分布している。基部・先端部加工の小形ナイフ形石器、やや幅広の縦長剥片などが出土している。出土数が少なく、所属時期を明確にすることは出来ない。しかしナイフ形石器は、堤西牟田第Ⅳ文化（萩原編1985a,b）に類例があるようである。堤西牟田第Ⅳ文化はナイフ形石器文化最終末の石器群であり、百花台型台形石器とほぼ同時期と考えられている。

（5）　遺物分布の傾向

本石器群には二つの石器密集部があり、原の辻型台形石器、百花台型台形石器の製作に係わる資料が検出されている。両者は、それぞれの型式の台形石器、石核、剥片、砕片、削器が認められ、共通の組成である。石器素材生産、石器製作、道具製作が行われていたと考えられる。しかし出土数は大きく異なり、A群では多数の石器が製作されていたと考えられる。

この他、A群集中部外れに縦長剥片素材のナイフ形石器などがあり、原の辻型台形石器とは時期を異にしていると考えられる。この中に、西牟田型石核と中山型石核が含まれている。中山型石核から剥離された剥片は、百花台型台形石器に加工される場合が多い。西牟田型石核は、ナイフ形石器文化最終末の堤西牟田第Ⅳ文化に認められる。A群のナイフ形石器やC群の基部加工ナイフ形石器は、堤西牟田第Ⅳ文化を特徴づける器種でもある。

百花台型台形石器と堤西牟田第Ⅳ文化のナイフ形石器の明確な共伴事例はないが、いずれもナイフ形石器文化最終末期の石器群であり、同一の集団が二つの石器製作システムを保持していた可能性はある。

〈引用・参考文献〉

萩原博文	2006	「九州西北部の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』（同成社）
萩原博文編	1985a	『堤西牟田遺跡』（平戸市教育委員会）
萩原博文編	1985b	『西中山遺跡・堤西牟田遺跡Ⅱ・平戸城跡緊急発掘調査報告書』（平戸市教育委員会）
福岡市教育委員会	1988	『井尻Ｂ遺跡』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第175集）
福岡市教育委員会	2000	『井尻Ｂ遺跡８―井尻Ｂ遺跡群第12次調査の報告―』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第645集）

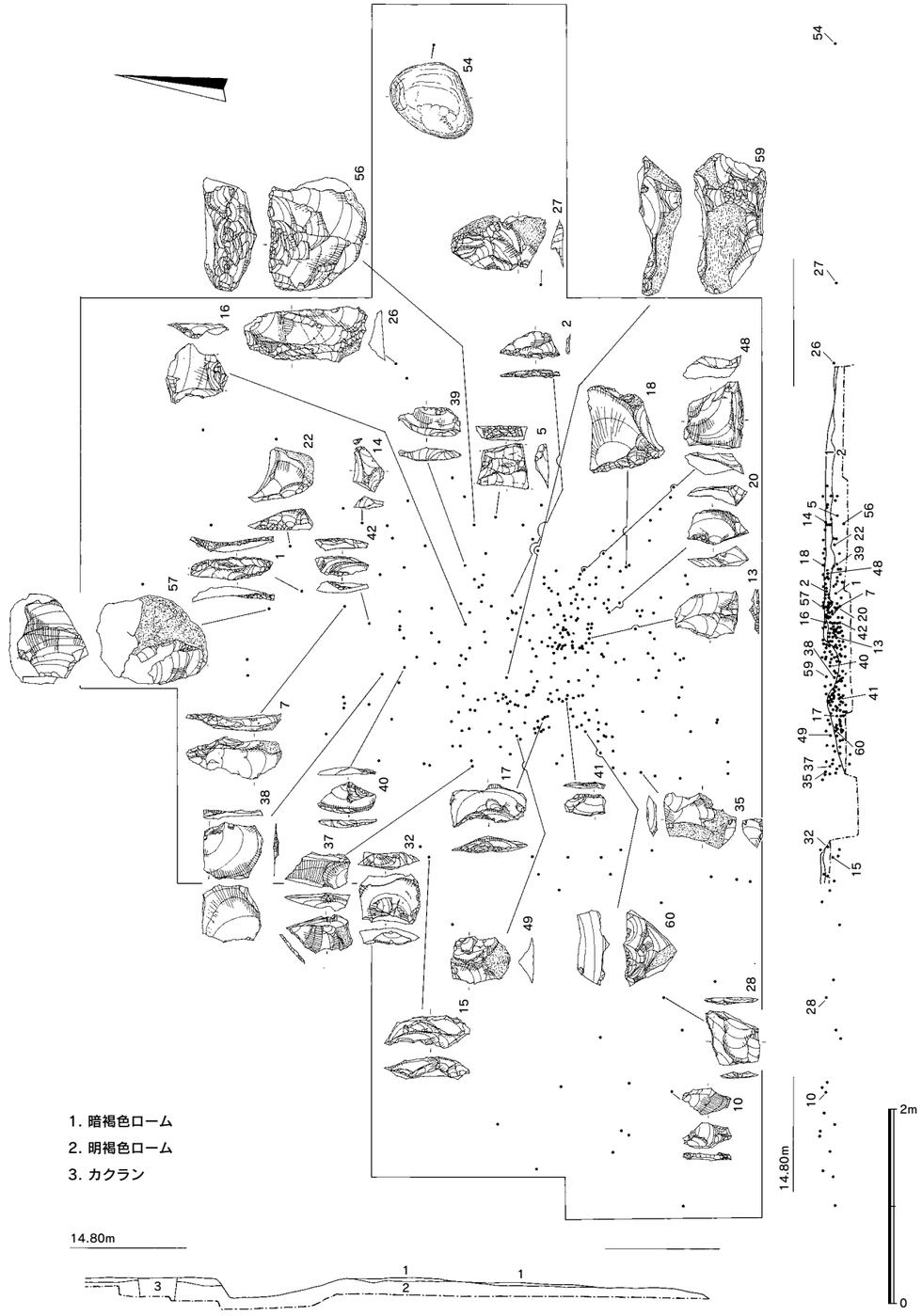


Fig.13　A群遺物出土状況実測図（1/60）

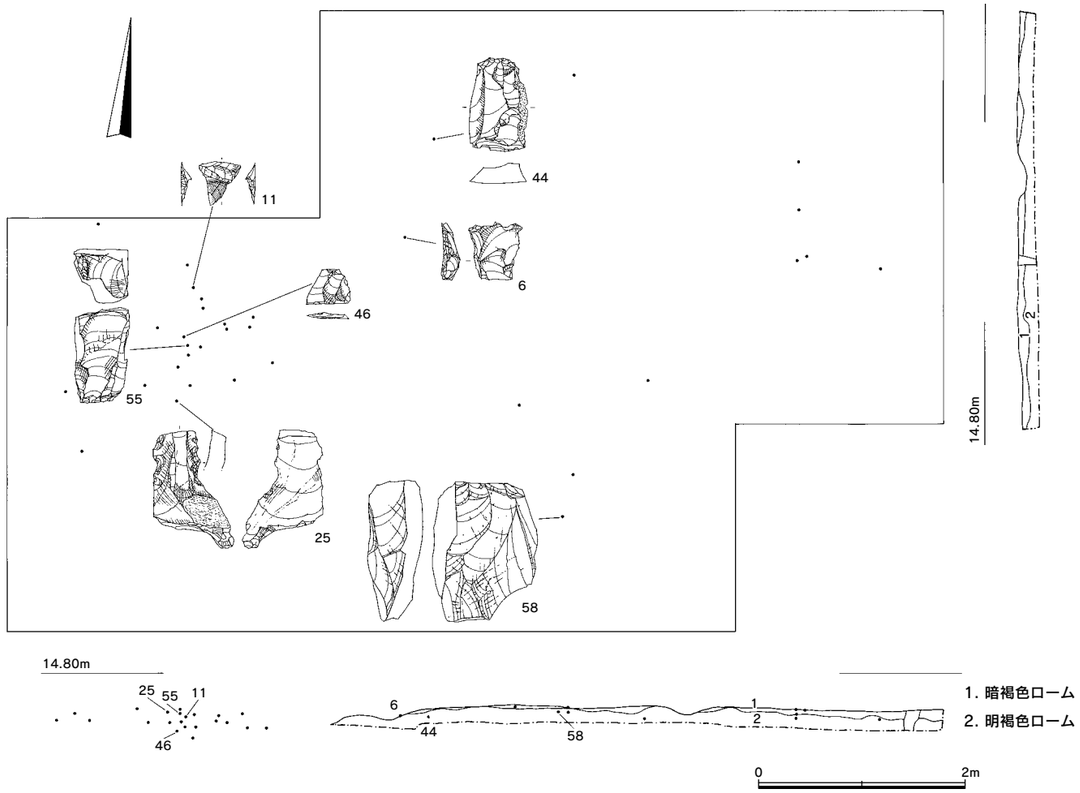


Fig.14　B群遺物出土状況実測図（1/60）

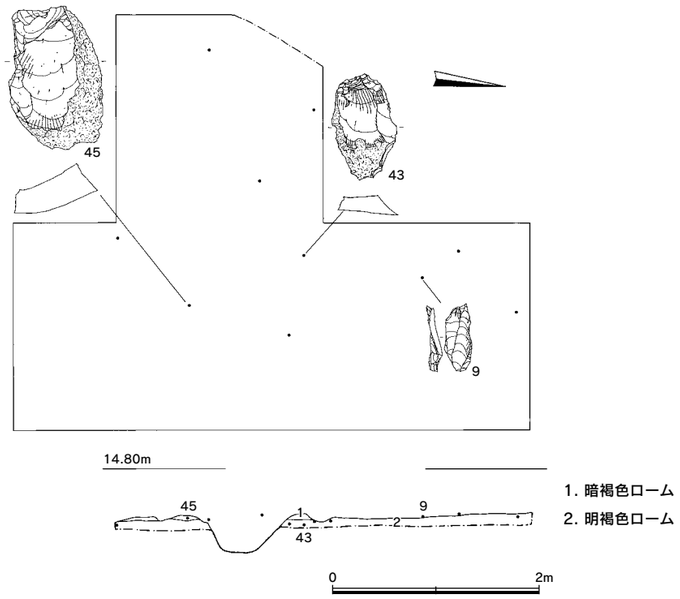


Fig.15　C群遺物出土状況実測図（1/60）

3．旧石器時代遺物各説

（1）　出土石器の概要

第1表のように、ナイフ形石器10点、台形石器13点など、総数527点の遺物が検出されている。A・B・C群という3つの地点から発掘されているが、A・B群の遺物集中部は石器製作址と考えられ、砕片の割合が8割近くを占める。福岡平野においては、極めて纏まった資料と言える。A群は全体の86％の石器類が検出され、そのほとんどは原の辻型台形石器製作に係わる一連の行動の結果、形成されたと考えられる。A群集中部から検出された台形石器は未製品や失敗品が多く、完成品の定形石器（原の辻型）は他の地点に運ばれ使用されたと考えられる。その一つが、第6次・12次調査（福岡市教育委員会2000）出土資料である可能性がある。磨石や彫器・削器の存在は、本石器群が石器製作のみを行う場ではない、ことを示しているのだろう。

A群の周辺部やB・C群では、これと異なる可能性の強い石器群が検出されている。百花台型台形石器や小形ナイフ形石器などによって特徴づけられる石器群である。これらは、定形石器の形態的特徴や剥片剥離技術などから、原の辻型台形石器と明らかに異なる時期の石器群と考えられる。遺物分布もこれを裏付けており、分布域はそれぞれ異なっている。

本石器群は、主に西北九州産の黒曜石を素材としている（第2表）。腰岳産黒色黒曜石角礫、松浦産黒色黒曜石円礫、針尾島産灰色黒曜石である。石器群の主体であるナイフ形石器、台形石器、彫器、削器はこれらの黒曜石を用いているのである。その点は、原の辻型石器群や他の石器群も同じであり、長期に及ぶものと思われる。福岡平野と西北九州石器群の類似性は、これに起因していると考えられる。西北九州の黒曜石産地に各地の集団が石材採取に訪れ、そこでの交流によって石器製作を学習したのであろう。少数だが、頁岩や花崗岩が認められる。これらは西北九州の石器群には認められず、詳細は明らかでないが、他地域との交流を示すのではないかと思われる。

第１表　器種別出土数

	ナイフ形石器	台形石器	彫器	削器	磨石	加工痕・使用痕ある剥片	使用痕ある砕片	剥片	砕片	石核	計
A群	6	11		1	1	15	6	59	352	5	456
B群	2	1		1				5	36	2	47
C群	1							2	6		9
その他	1	1	1			3		5	4		15
計	10	13	1	2	1	18	6	71	398	7	527

＊剥片の内、原の辻型素材6点。砕片の内、原の辻型関連32点、ブランティング・チップ13点、彫器スポール2点。

第２表　石器素材別出土数

	黒色黒曜石	灰色黒曜石	頁岩	安山岩	花崗岩	計
A群	411	43		1	1	456
B群	43	3		1		47
C群	7	2				9
その他	12	1	2			15
計	473	49	2	2	1	527

（2）　ナイフ形石器

二側辺加工ナイフ形石器（図１）、片側辺加工ナイフ形石器（図2～6）、部分加工ナイフ形石器（図7～9）、ペン先状小形ナイフ形石器（図10）が検出されている。

図1（R247）は、石刃状の薄い縦長剥片を素材とする典型的小形二側辺加工ナイフ形石器である。柳葉形を呈し、北部九州に最も基本的な形態である。バルブ部は、ブランティング調整によって取り除いている。背面から丁寧な急傾斜細調整（ブランティング）を加えているが、右側辺先端部の一部に正面からの加撃を施している。先端部に、長軸と平行する線状痕が認められる。A群出土。黒色黒曜石製。長さ28.5㎜、幅8.5㎜、最大厚3.5㎜、重さ0.48ｇ。

図2（R61）は、石刃状の小形縦長剥片の左側辺に、急傾斜細調整（ブランティング）を施している。僅かに下端部が折断されており、二側辺加工ナイフ形石器の可能性もある。打面部はブランティングにより取り除いている。刃部に、使用によると思われる刃こぼれが観察される。A群出土。透明に近い黒色黒曜石製であるが、不純物が線状に認められる。長さ21.0、幅9.6㎜、最大厚2.7㎜、重さ0.11ｇ。図3（R190）は、石刃状の縦長剥片を素材としている。先端部は折断されているが、バルブ部を基部にしていることから、片側辺加工ナイフ形石器と推定される。左側辺の加工は、急傾斜細調整（ブランティング）によるものである。A群出土。黒色黒曜石製。長さ21.4㎜、幅14.2㎜、最大厚5.5㎜、重さ1.22ｇ。図4（撹乱03）は、短い比較的薄い剥片の片側縁に、急傾斜細調整（ブランティング）を施している。打点が一方に偏っており、一見斜軸尖頭器状を呈する。透明に近い黒色黒曜石の短い剥片を素材としている点は、台形石器と同じである。両端に打面を持つ石核から剥離されているが、剥離面頭部調整は顕著でない。長さ27㎜、幅15.4㎜、最大厚4.5㎜、重さ1.3ｇ。図5（R229）は、右側辺に急傾斜細調整を施すが、両端が折断されているため、全体の形状は不明である。恐らく、一般的な片側辺加工ナイフ形石器と思われる。折断は、製作中によるものか、使用に原因があるか不明である。A群出土。灰褐色を呈する黒曜石を用いている。長さ18.0㎜、幅16.0㎜、最大厚5.1㎜、重さ1.03ｇ。図6（R140）は、薄手の短い剥片の片側縁に、急傾斜細調整（ブランティング）を施している。急傾斜細調整は、基部を中心に施している。先端部は粗い調整を加え、鋸歯状を呈している。基部は折断により形状を整えており、一見台形石器に見える。極めて短形のナイフ形石器で、珍しい形態である。正面の剥片剥離面の加撃方向は、多方向である。B群出土。針尾島産と思われる灰色黒曜石を素材としている。長さ19.1㎜、幅17.6㎜、最大厚5.5㎜、重さ0.96ｇ。

図7（240）は縦長剥片を素材としている。右側辺上部に急傾斜細調整を施し、右側辺下部は折断により整形している。加工によりバルブ部を取り除いているが、あまり丁寧な加工とはいえない。自然面を僅かに残している。円礫から剥離された剥片を素材としている。A群出土。灰色に近い黒色黒曜石製。長さ33.0㎜、幅15.0㎜、最大厚4.4㎜、重さ0.97ｇ。図8（C2、no6）は、極めて小形の剥片の左側縁先端部に、急傾斜細調整（ブランティング）を施し、ペン先状を呈する。右側縁基部に、樋状剥離状の加工痕が認められる。正面と背面では剥片剥離の加撃方向が異なり、石刃技法とは異なる手法により制作されたと考えられる。B群出土。透明に近い黒色黒曜石製。長さ20.0㎜、幅10.1㎜、最大厚4.5㎜、重さ0.4ｇ。図9（R235）は、剥片の基部（打面部）側の左側辺に正面からの細調整痕、剥片の先端部に背面からの調整痕と思われる痕跡のある小形のナイフ形石器である。細かな打面調整を行う石核から剥離された、石刃状の小形剥片が用いられている。左側辺には、折断面が観察される。C群出土。黒色黒曜石製。長さ21.8㎜、幅9.0㎜、最大厚4.1㎜、重さ0.44ｇ。

図10（294）は、極めて小形で薄い剥片（または砕片）を素材とし、ペン先状に仕上げたものである。左側辺は、基部と先端部に細かな調整痕が観察される。基部は背面、先端部は正面からの加撃で整形し

Fig.16　出土旧石器実測図（縮尺=実物大）　①

ている。右側辺下部は、背面からの加撃によるものである。A群出土。灰色黒曜石製。長さ17.0㎜、幅9.1㎜、最大厚2.2㎜、重さ0.14ｇ。

（３）　台形石器

百花台型台形石器（図11）、ウワダイラ型台形石器（図12～14）、原の辻型台形石器および関連資料（図15～20）、その他（図21・22）が発掘されている。

図11（R135）は、極めて薄い小石刃を素材としている。左側辺は細調整と折断、右側辺は折断により正三角形に近い形状に仕上げている。片側辺加工ではあるが、正面形は典型的な百花台型台形石器と同じである。本遺跡のような中山型石核（図56）と百花台型台形石器の組み合わせは、百花台遺跡（麻生・白石1976）、中山遺跡（萩原1977）、神の池遺跡Ｂ地点（萩原1991）など西北九州に一般的である。本例は、近接出土の小石刃核から剥離された剥片を素材としている可能性が高い。Ｂ群出土。透明に近い黒色黒曜石製。長さ14.7㎜、幅13.8㎜、最大厚2.5㎜、重さ0.22ｇ。

図12（検出面no1）は、短い薄い剥片の先端部に急傾斜細調整（ブランティング）を施している。下端部にも正面からの大きな調整痕が認められる。打面部は原形を留めており、取り除こうとする意志は認められない。透明に近い黒色黒曜石の短い剥片を素材としている。剥片の正面には、二方向からの加撃痕が観察できる。刃部には、連続する刃こぼれが正面に認められる。長さ16㎜、幅22.5㎜、最大厚3.4㎜、重さ0.79ｇ。図13（183）は、小石刃状の薄い小形剥片を素材とする石器である。先端部は折断しているが、その部分に細かな調整痕が認められ、ウワダイラ型台形石器のカテゴリーに含められよう。打面部にも調整痕が認められるが、その意図は明らかでない。刃部の一部に、使用痕と思われる刃こぼれが観察できる。A群出土。透明に近い黒色黒曜石製。長さ17.0㎜、幅22.0㎜、最大厚5.8㎜、重さ1.11ｇ。図14（R89）は、極めて小形の剥片を素材とする台形石器と思われ、剥片の先端部に僅かではあるが、細調整痕が観察される。打面部正面に認められる調整痕は、剥離面頭部調整と思われる。A群出土。黒色黒曜石製。長さ11.0㎜、幅16.0㎜、最大厚4.3㎜、重さ0.36ｇ。ウワダイラ型台形石器は長崎県崎瀬遺跡などに類例がある（萩原・加藤1990）が、これらＡＴ降灰前のものに比べ小形で、端部調整のあり方に違いがある。

図15（R242）は、左側辺部を正面からの平坦細調整で取り除かれた失敗品である。僅かに、基部側に背面からの調整痕が認められる。右側辺は正面からの大きな剥離痕が観察され、正面に平坦細調整を施す点は、原の辻型台形石器を特徴づける加工技術である。背面に微細な調整痕が認められ、刃部に使用痕と思われる刃こぼれが存在することから、道具として使用された可能性も否定できない。A群出土。透明に近い黒色黒曜石製。長さ30.0㎜、幅11.6㎜、最大厚6.0㎜、重さ1.72ｇ。図16（R66）は、下端部正面からの調整が想定より大きな剥離となり、台形石器に加工することが困難になったと考えられる。この調整により、右側面も除去されている。左側辺はノッチ状の急傾斜細調整を施し、正面下端部に平坦細調整が認められる。これらは原の辻型台形石器に良く見られ、製作の途上で断念したものと思われる。刃部は円形状をなし、顕著な刃こぼれが認められる。刃部近くの正背両面に顕著な線状痕が認められる。刃こぼれや線状痕の存在は、剥離痕が使用によって生じた可能性も想定される。A群出土。透明に近い黒色黒曜石製。長さ21.5㎜、幅21.0㎜、最大厚5.2㎜、重さ1.66ｇ。図17（R317）は、不定形の幅広剥片を素材とし、右側辺には正面からの加撃による特徴的な調整痕が認められる。剥片の正背両面を有する砕片が剥離されている。僅かではあるが、右側辺から正面への細調整痕が認められる。左側縁下部には、背面からの加撃による調整痕が認められる。ノッチ状を呈すると思われる。左側縁上部が欠損しているため、ここに刃部が存在していたか明らかでないが、原の辻型台形石器に含められよう。A群出

土。透明に近い黒色黒曜石製。長さ26.5㎜、幅13.4㎜、最大厚5.6㎜、重さ0.88ｇ。図18（R154）は、右側辺に正面からの大きな調整、左側面は背面からの剥離痕が認められる。右側縁の調整では、剥片の正背両面を有する特徴的な砕片が剥離されている。基部は折断されている。右側辺下部から正面への明確な平坦細調整確認出来ず、本来刃部が形成される左側縁上部に自然面を残すが、原の辻型台形石器のカテゴリーに含められる。刃部の一部に、使用によると思われる細かな刃こぼれが観察される。A群出土。透明に近い黒色黒曜石製。長さ18.0㎜、幅22.8㎜、最大厚8.8㎜、重さ1.66ｇ。図19（R203）は右側面に調整痕が認められ、左側面の上部は折断を施している。正面に調整痕は認められないが、右側辺は正面からの加撃で整形しており、原の辻型台形石器に近い形態である。剥片剥離の加撃方向が複数であることも、原の辻型の素材生産技術と共通している。刃部の一部に、使用痕と思われる小さな刃こぼれが認められる。A群出土。透明に近い黒色黒曜石製。長さ36.0㎜、幅17.8㎜、最大厚6.4㎜、重さ2.86ｇ。図20（R98）は、原の辻型台形石器製作の初期段階（萩原1983）に生じた砕片と同じような素材に微調整を加え、台形石器状に仕上げたものである。左側辺先端部の正面、右側縁に微調整痕が認められる。左右の側辺部が、元の剥片の正面と背面であったと考えられる。使用痕ある砕片とすべきかも知れない。A群出土。透明に近い黒色黒曜石を素材としている。長さ21.9㎜、幅12.2㎜、最大厚5.2㎜、重さ0.67ｇ。

図21（R40）は、風化の著しい黒色黒曜石の大形不定形剥片を素材としている。原の辻型台形石器の素材生産と類似する技法で製作された剥片を素材としている。両側辺に粗い調整を施しているが、左側辺には自然面を残している。両側辺ともに、正面からの加撃で調整を行っている。正面右端部に、数ヶ所の加撃痕が認められる。その加撃痕は一部の石核同じであり、かなり大きな直接または間接による加撃が加わったと考えられる。A群出土。長さ26.2㎜、幅30.0㎜、最大厚12.0㎜、重さ4.94ｇ。図22（R249）は、幅広の短形剥片を素材としている。切り出し状のナイフ形石器に含める考え方もあるかと思われるが、斜め刃をもって両者を区分出来ないと思われる。調整加工のあり方と、部位等により台形石器と判断した。左側面は背面からの急傾斜細調整により整形し、右側面は正面から一ヶ所の調整と思われる痕跡が認められる。バルブ部は、平坦細調整を加え取り除いている。A群出土。灰色黒曜石製の円礫を素材としている。長さ22.8㎜、幅19.0㎜、最大厚7.0㎜、重さ1.43ｇ。

（４）　彫器

図23（R撹乱06）は、やや大形厚手の縦長剥片の両端に、折断によりスポールプラットフォームを形成している。上端部の折断面に加工痕はないが、左側辺に樋状剥離を加え、ビューランエッジを作り出している。下端部は細かな加工痕が観察される点で上端部と異なるが、同じように端部に樋状剥離を加えている。北部九州の角形彫器は、急傾斜細調整によりスポールプラットフォームを形成を形成するのが一般的で、本例はこれと同じ素材を用いているが明確な調整痕は認められない。右側縁には使用痕が認められるが、背面に複雑な擦痕が認められる。僅かに不純物があるが、比較的均質の黒色黒曜石を素材としている。長さ45.1㎜、幅26.2㎜、最大厚6.4㎜、重さ5・8ｇ。

（５）　削器

図24（R1）は短形、やや幅広の剥片を素材とするコンケイブ・スクレーパーである。斜め細調整により、抉りを入れている。抉り面の反対側には、使用痕と思われる細かな刃こぼれが認められる。僅かに剥片の先端部を折断しているため、一見台形石器状を呈する。打面調整痕は認められないが、丁寧な剥離面頭部調整を行っている。A群出土。黒色黒曜石製。長さ30.7㎜、幅25.7㎜、最大厚7.2㎜、重さ3.23ｇ。図25（R131）は、不定形剥片を素材とし、両側縁の一部に斜細調整を不規則に施している。背面

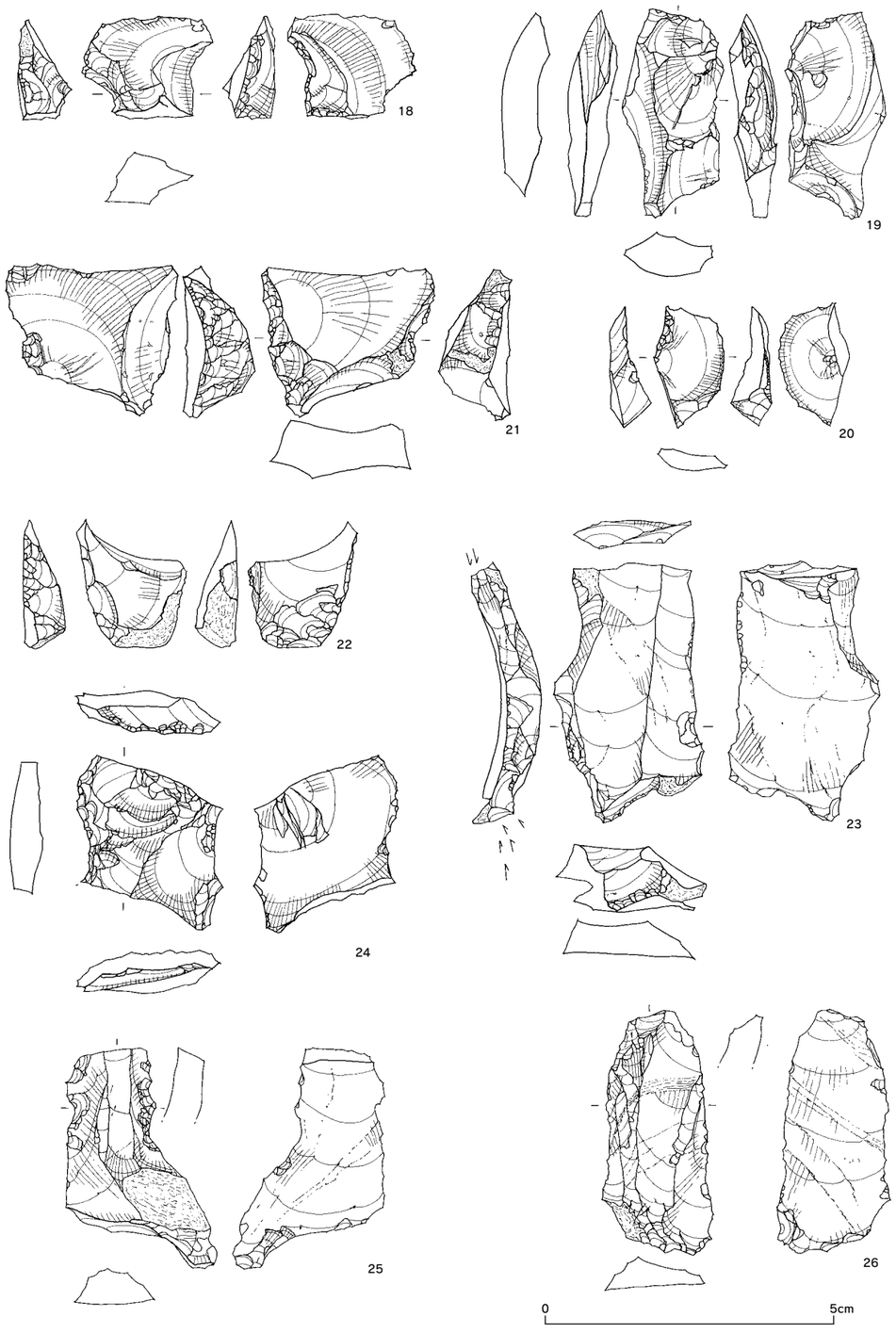


Fig.17　出土旧石器実測図（縮尺＝実物大）　②

に不規則な線状痕を観察できる。打面部は折断され、先端部は自然面を打面とする剥片剥離面が認められる。両面の剥片剥離面の加撃方向から、多打面を有する石核から剥離されたと考えられる。B群出土。下端部に残る自然面から、腰岳産と思われる黒色黒曜石製の角礫と判断できる。長さ39.0㎜、幅26.5㎜、最大厚9.6㎜、重さ4.0ｇ。

（6）　磨石

図54（R259）は、各処に部分的な摩耗痕が認められる。特に下端部の摩耗痕は著しく、窪みを形成している。ハンマーストーンとも考えられるが、風化などのため敲打痕が確認出来ない。A群外れより出土している。風化の著しい花崗岩製。長さ50.5㎜、幅56.0㎜、最大厚38.0㎜、重さ78.46ｇ。

（7）　加工痕・使用痕ある剥片

図26～28は縦長剥片を素材とし、29～32は原の辻型台形石器と同じ石核から剥離された剥片を用い、33～38はその他の不定形剥片に、不規則な調整痕や微細な刃こぼれが存在する石器である。

図26（R217）は、刃部の一部に使用痕と思われる刃こぼれが認められる。両面の剥片剥離の方向がほぼ一定なので、石刃生産に近い技法が想定できる。A群出土。線状に不純物の混入した黒色黒曜石製。長さ42.8㎜、幅19.7㎜、最大厚7.1㎜、重さ3.74ｇ。図27（R258）は、左側縁に使用痕と思われる刃こぼれが認められる。刃こぼれは、正背両面に観察される。正面打面近くに、自然面から加撃した剥片剥離面が認められる。A群の外れで検出。自然面より、黒色黒曜石の円礫を素材としていることが分かる。長さ33.0㎜、幅19.1㎜、最大厚7.8㎜、重さ2.34ｇ。これらはナイフ形石器の素材としても適当であるが、自然面を残しているため加工しなかったのだろう。図28（R253）は両側面を折断によって整形しているが、左側辺に僅かな調整痕が認められる。刃部には、明瞭な連続する刃こぼれ（または微調整痕）が観察される。下方の刃部にも、刃こぼれが認められる。A群出土。透明に近い黒色黒曜石製。長さ18.2㎜、幅19.0㎜、最大厚2.8㎜、重さ0.55ｇ。

図29（R5）は、刃部（下端部）に使用痕と思われる刃こぼれが認められる。剥離面の加撃方向が多様な点は、原の辻型の素材生産技術と同じである。A群出土。透明に近い黒色黒曜石製。長さ22.0㎜、幅26.2㎜、最大厚5.7㎜、重さ1.75ｇ。図30（R76）は、不定形の短形幅広剥片の左側辺と下端部に不規則な調整痕が認められる。左側辺は正面、下端部は背面から斜め細調整を施している。左側辺には折断面も観察される。A群出土。透明に近い黒色黒曜石の角礫を素材としている。長さ29.0㎜、幅22.0㎜、最大厚6.2㎜、重さ2.5ｇ。図31（撹乱no2）は、正面に原の辻型と共通する調整痕（剥片剥離面の可能性もある）が認められる。しかし、大きさや正面形状に違いがある。左側縁上部に微調整痕と思われる痕跡、斜め状を呈する刃部に使用痕が認められる。明確な調整痕はないが、台形石器と同じ機能持つと考えられる。ガラス質で均質の黒色黒曜石を素材としている。長さ30.5㎜、幅16㎜、最大厚6.5㎜、重さ1.7ｇ。図32（R169）は幅広短形の剥片で、正面に自然面を大きく残している。右側縁は剥片の打面をそのまま残し、左側辺は折断により整形し、台形石器状を呈する。下方刃部に連続する刃こぼれが認められる。A群出土。透明に近い黒色黒曜石の円礫を用いている。長さ22.0㎜、幅17.6㎜、最大厚4.9㎜、重さ1.5ｇ。これらは、形状や大きさなどが微妙に異なり、原の辻型台形石器に加工されなかったのだろう。

図33（検出面no8）は、頁岩製の薄い剥片の端部を折断し、台形石器に近い形状にしている。正面と背面では剥片剥離の方向が異なっている。左側縁に使用によると思われる痕跡が認められる。長さ25.8㎜、幅25.7㎜、最大厚4.5㎜、重さ2.05ｇ。図34（R124）は、小形短形の縦長剥片の刃部に、部分的な細かな刃こぼれが認められる。剥離面頭部細調整を行っているが、打面部の厚みを減じるには至っていな

い。A群出土。透明に近い黒色黒曜石製。長さ28.5㎜、幅17.0㎜、最大厚5.8㎜、重さ1.32ｇ。図35（R106）は、底面を有する不定形剥片の下端部に刃こぼれが認められる。打面・下面ともに、調整痕は認められない。A群出土。透明に近い黒色黒曜石製の角礫を素材としている。長さ25.0㎜、幅19.8㎜、最大厚7.0㎜、重さ1.78ｇ。図36（A3 no1）は、側縁に使用によると思われる不規則な刃こぼれのある使用痕ある剥片である。刃こぼれは背面に認められる。剥片の基部と一方の側辺が折断されている。A群出土。透明に近い黒色黒曜石製。長さ15.1㎜、幅11.2㎜、最大厚3.0㎜、重さ0.4ｇ。図37（R120）は、不定形系の小形剥片を素材としている。先端部に、連続する顕著な使用痕（または微調整痕）が認められる。剥片のバルブ部は、折断により取り除いている。基部の剥離痕が平坦細調整であれば、台形石器とすべきかも知れない。A群出土。透明に近い黒色黒曜石の角礫を素材としている。長さ23.0㎜、幅13.2㎜、最大厚4.5㎜、重さ0.69ｇ。図38（R80）は幅広で薄い不定形剥片で、左側縁打面近くに連続する刃こぼれが認められる。下端部にも剥離痕らしきものが観察される。台形石器の未製品あるいは失敗品の可能性もある。A群出土。透明に近い黒色黒曜石製。長さ20.5㎜、幅20.0㎜、最大厚3.0㎜、重さ0.8ｇ。

（8）　使用痕ある砕片

ここでは、原の辻型台形石器製作時の初期段階に生じたもので、打面と下端部を有する砕片の中で使用痕（微細剥離痕）のあるものを「使用痕ある砕片」と称する。

図39（R237）は、左側縁に細かな連続する刃こぼれが認められる。砕片の基部にも調整痕が認められる。このような特徴的な微細な剥離痕をもつ砕片は、百花台東遺跡（松藤編1994）などに認められる。このような底面をもつ砕片は、原の辻型台形石器と共伴する事例が多い。A群出土。透明に近い黒色黒曜石製。長さ21.8㎜、幅10.2㎜、最大厚3.6㎜、重さ0.49ｇ。図40（R79）は、左側縁には連続する刃こぼれ（微調整）が認められる。正面下部には、石器制作時の細調整痕が認められる。A群出土。透明に近い黒色黒曜石製。長さ20.7㎜、幅11.0㎜、最大厚2.3㎜、重さ0.31ｇ。図41（R316）は、左側縁に細かな刃こぼれが認められる。右側縁正面に認められる調整痕は、石器制作時に生じた可能性もある。大きな調整を行う前の微調整痕と考えられる。A群出土。黒色黒曜石製。長さ14.8㎜、幅8.0㎜、最大厚2.2㎜、重さ0.13ｇ。図42（R84）は、右側縁に連続する刃こぼれ（微調整）が認められる。打面部の正面に左側縁から加えられた調整痕は、砕片剥離後に施された可能性が強い。A群出土。黒色黒曜石製。長さ19.0㎜、幅7.0㎜、最大厚3.6㎜、重さ0.34ｇ。

（9）　剥片

やや幅広の縦長剥片（図43～45）、小石刃の折断剥片（図46）、原の辻型台形石器の素材と同じような剥片（図47～52）、その他の不定形剥片（図53）が認められた。縦長剥片の中には、ナイフ形石器の素材として適当なものもある。

図43（R302）は、自然面を大きく残す比較的小形の厚手剥片である。打面調整痕は認められないが、剥離面頭部細調整を施している。C群出土。黒色黒曜石製。長さ34.6㎜、幅21.4㎜、最大厚7.6㎜、重さ3.29ｇ。図44（R262）は、灰色黒曜石製の短い寸詰まり剥片である。左側縁には鋭い刃部が形成され、右側辺は自然面が残存している。剥片剥離面の方向から、上下に打面を有する石核から剥離されたと考えられる。B群出土。長さ30.8㎜、幅19.3㎜、最大厚6.5㎜、重さ2.99ｇ。図45（R304）は、灰色黒曜石製の大形幅広剥片である。右側辺に自然面が大きく残っている。広い打面部が認められるが、打面調整の痕跡はない。下端部の剥離痕の方向から、複数の打面を有する石核から剥離されたと考えられる。やや厚手ではあるが、削器や彫器の素材として適当である。C群出土。長さ46.8㎜、幅30.8㎜、最大厚15.5

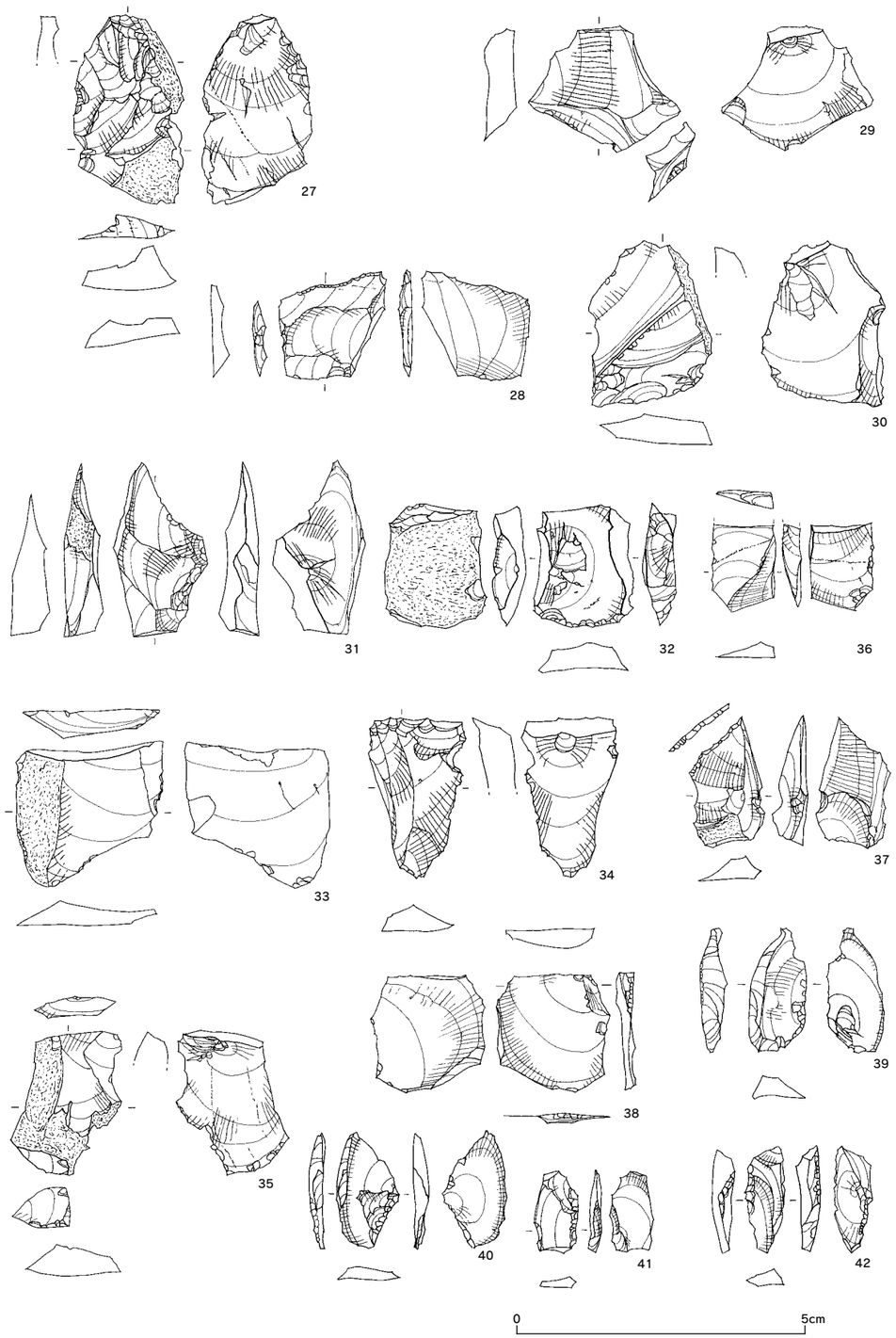


Fig.18　出土旧石器実測図（縮尺＝実物大）　③

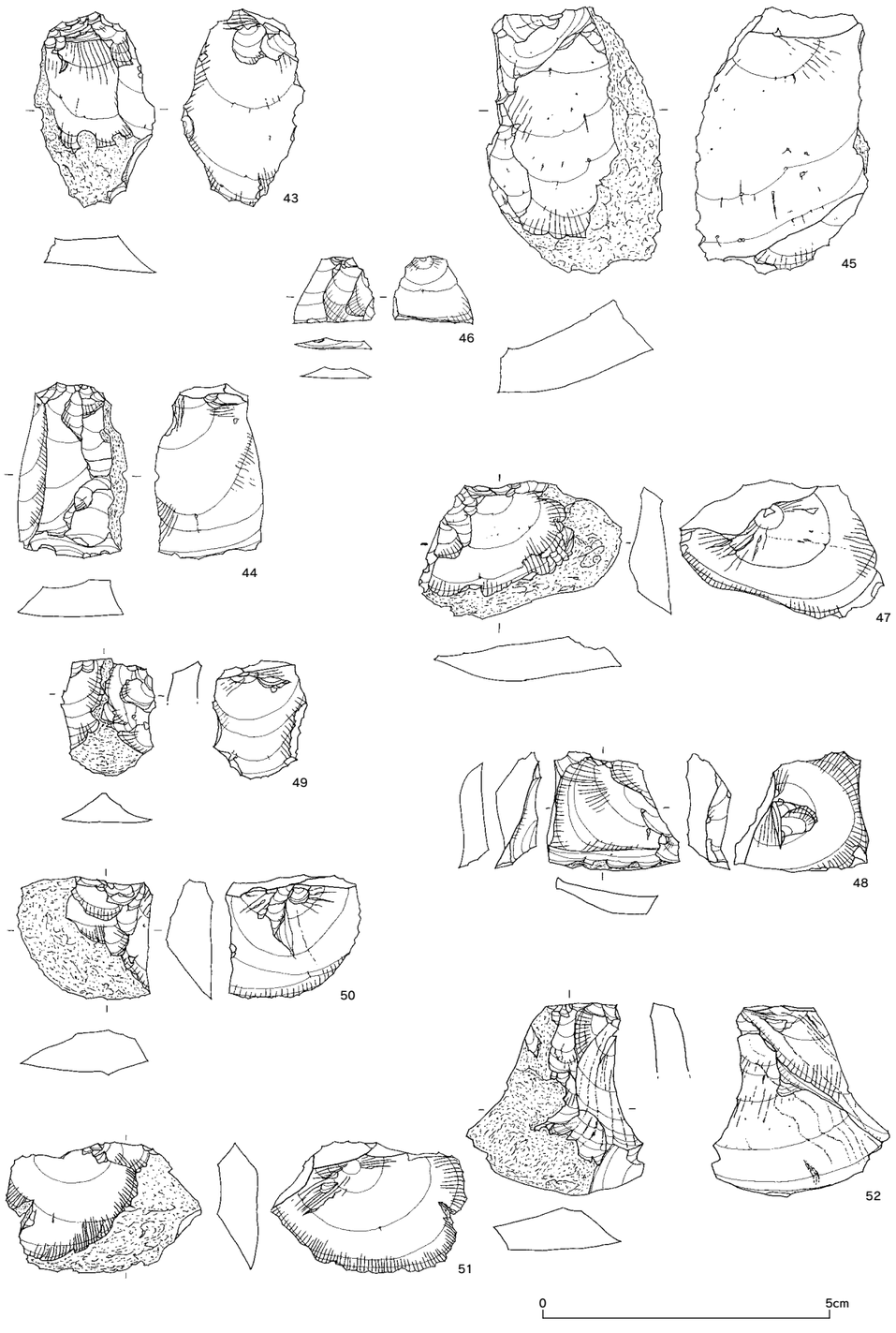


Fig.19　出土旧石器実測図（縮尺＝実物大）　④

㎜、重さ15.91ｇ。

図46（R231）は小石刃の頭部と思われ、折断により分割している。透明に近い黒色黒曜石製の非常に薄い資料である。調整痕は認められない。打面に細かな調整痕を観察できる。B群出土。長さ12.0㎜、幅14.6㎜、最大厚2.5㎜、重さ0.28ｇ。

図47（R22）は端部に自然面を残す、幅広の剥片である。打面に調整痕は認められない。A群出土。風化が著しく、不純物の混入している黒色黒曜石製。長さ24.0㎜、幅35.8㎜、最大厚7.5㎜、重さ3.64ｇ。図48（R34）は、比較的薄い幅広剥片である。剥片の先端部は折断されているが、ほんの一部に過ぎない。打面調整は認められない。一部に自然面を残すが、台形石器の製作を意図して剥離されたと考えられる。A群出土。透明に近い黒色黒曜石製。長さ24.0㎜、幅21.0㎜、最大厚4.8㎜、重さ1.77ｇ。図49（R118）は正面に自然面を残す、短い幅広の小形剥片である。打面には、調整痕が認められる。A群出土。透明に近い黒色黒曜石の円礫を素材としている。長さ20.4㎜、幅16.8㎜、最大厚5.6㎜、重さ0.91ｇ。図50（R343）は、台形石器の素材として適当な形状の幅広剥片である。A群出土。灰色に近い黒色黒曜石の円礫を用いている。表面は、著しい風化の状況が観察される。長さ21.4㎜、幅24.0㎜、最大厚7.6㎜、重さ2.67ｇ。図51（R352）は正面に自然面を残す、幅広剥片である。A群出土。黒色黒曜石の円礫を素材としている。長さ23.2㎜、幅34.1㎜、最大厚7.4㎜、重さ2.91ｇ。図52（166）は不定形の幅広剥片で、剥離面頭部細調整を行っている。A群出土。黒色黒曜石の角礫を使用している。自然面の状況と特徴的な線状を呈する不純物から、腰岳産と思われる。長さ34.0㎜、幅31.7㎜、最大厚7.2㎜、重さ4.16ｇ。これらは原の辻型台形石器の製作を目的に剥離されたものだが、小形である点や刃部や自然面の状況が石器として適当でないため、石器を作るための細調整を断念したものと思われる。

図53（撹乱09）は、頁岩製の厚手剥片である。剥片剥離時に一部が飛び散ったと考えられ、全体の形状は不明である。両面の剥片剥離の加撃方向に一定の方向性はない。正面の剥離面の観察から、周囲から剥離を行っていることが分かる。長さ39㎜、幅47.5㎜、最大厚15㎜、重さ18.97ｇ。

（10）　石核

小形石刃核（図55）、中山型石核（図56）、西牟田型石核（図57）、やや大型の剥片素材石核（図58）、原の辻型台形石器の素材を剥離した石核（図59）、剥片製小形石核（図60）が確認されている。

図55（R133）は、上下両端に打面を有する角錐状の小石刃核である。上部は平坦だが、調整痕が僅かに認められる。最終的局面で剥離が下端部に達せず、失敗に終わり放棄したと考えられる。下端部では、両面の剥片剥離面を交互に打面としている。打角は、上端部が90°に近いのに対し、下端部は極めて鋭いものになっている。側面の形状はクサビ状を呈する。B群出土。比較的均質の黒色黒曜石の分割礫を素材としている。長さ31㎜、幅17.5㎜、最大厚17.5㎜、重さ7.65ｇ。

図56（R261）は、灰色黒曜石製の円礫を素材とする特徴的な石核である。両面に剥片剥離面が認められる。背面から正面へと転移し、鋭い打角を形成している。上面に丁寧な調整痕が認められ、残核をスクレーパーに再利用した可能性がある。しかし、図示したように稜線がジグザグで、剥離面頭部調整である可能性が高い。幅広で薄い剥片を生産していたものと思われ、主に小形台形石器の素材に利用されたと思われる。前述のように、類例が百花台遺跡、中山遺跡など西北九州の百花台型台形石器主体の遺跡で確認されている。円盤状を呈する石核の、一形態と考えられる。A群出土。長さ34.0㎜、幅39.0㎜、最大厚18.0㎜、重さ18.3ｇ。

図57（R91）は、灰色に近い黒色黒曜石の円礫を素材とする不定形の石核である。円礫の長軸の一方を打面とし、短い不定形の幅広剥片を剥離している。僅かに打面調整が認められる。剥片剥離面の状況

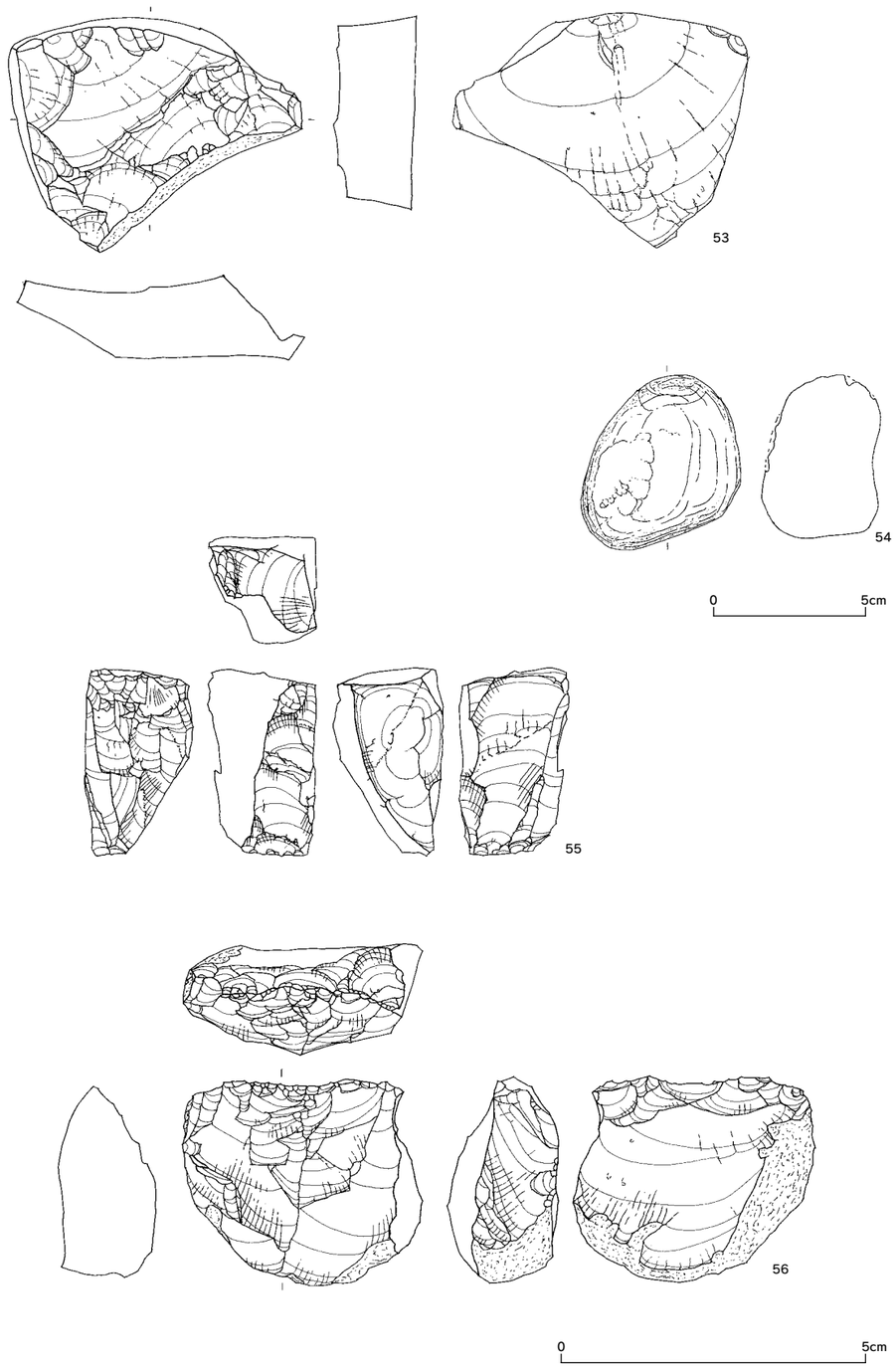


Fig.20　出土旧石器実測図（縮尺＝磨石1／2、他は実物大）　⑤

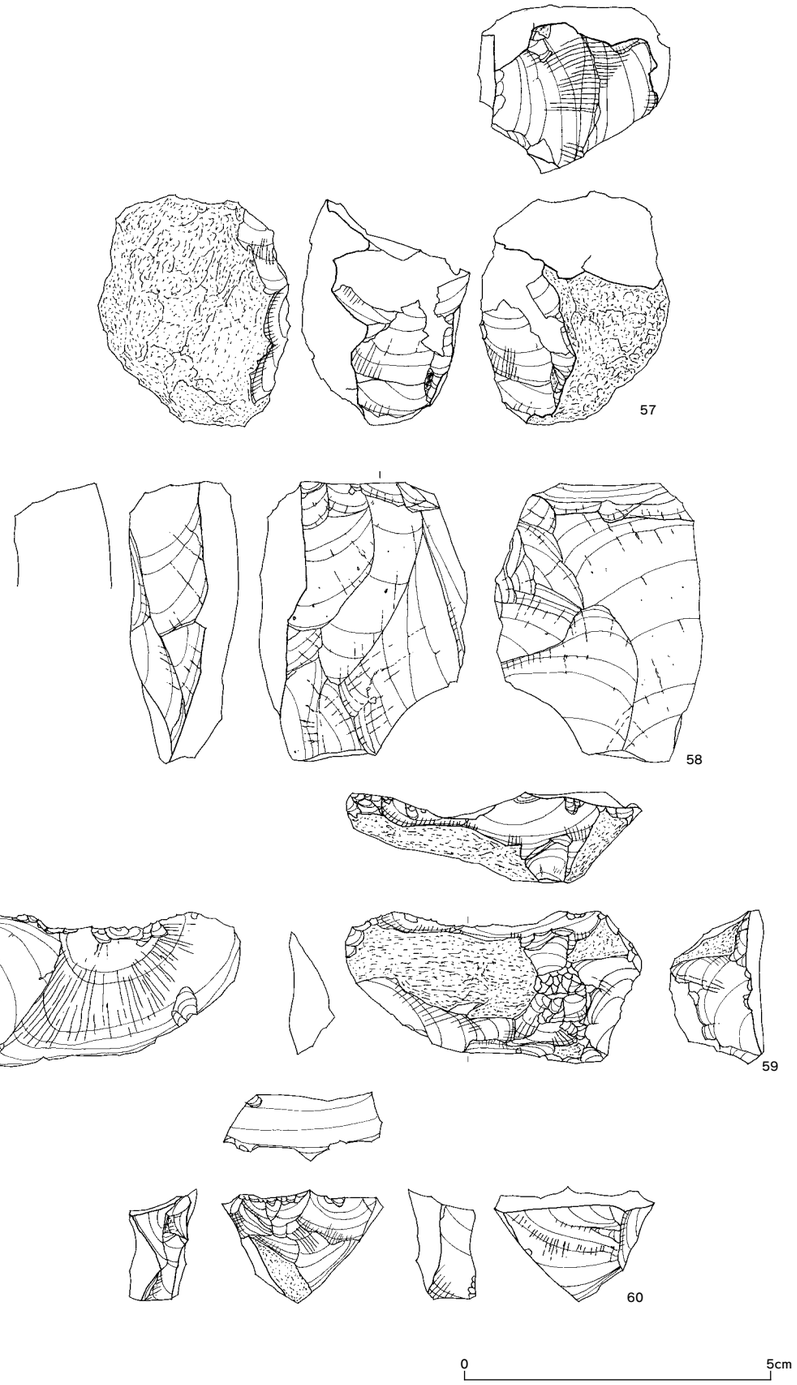


Fig.21　出土旧石器実測図（縮尺＝実物大）　⑥

から、比較的薄い剥片を剥離することにより、打面再生を行っていることが分かる。これが限界に達すると、打面転移を行うものと思われる。剥片剥離は、全周の二分の一程度で行われている。A群出土。長さ38.2㎜、幅30.8㎜、最大厚26.8㎜、重さ13.75ｇ。

図58（R143）は、古銅輝石安山岩製の大形で厚い剥片を素材とする石核と思われる。少なくとも、上下両端に打面が形成されている。剥片剥離が進行し、下端部の打面は僅かにその存在が確認される状況である。正面に形成された剥片数枚は、上端の斜めに形成された打面から剥離されたものである。打面調整は認められない。剥離された剥片は、比較的短形で幅広であったと考えられる。剥離面頭部調整は顕著でない。B群出土。長さ46.0㎜、幅34.0㎜。最大厚12.3㎜、重さ19.4ｇ。

図59（R51）は、正面と側面部全体に剥片剥離面を持つ、円盤状に近い形状を呈する石核である。正面は、側面からの加撃で幅広剥片を剥離している。剥離面は二面のみだが、加撃点は周囲を廻ることを意識しているように思える。特徴的な、厚手の幅広剥片が生産されている。側辺部は、正面の剥片剥離面からの加撃で比較的幅広の短い剥片が制作されている。原の辻型台形石器の素材となる剥片剥離の終了した、残核と考えられる。A群出土。腰岳産と思われる、透明に近い黒色黒曜石の角礫を用いている。長さ25.0㎜、幅48.0㎜、最大厚15.0㎜、重さ8.24ｇ。

図60（R219）は、比較的厚い剥片を素材とする小形の石核である。打面は平坦で、折断面を利用したと思われる。極めて小形の、砕片状の剥片を剥離している。A群出土。腰岳産と思われる、透明に近い黒色黒曜石の角礫を素材としている。長さ19.0㎜、幅26.2㎜、最大厚9.8㎜、重さ2.44ｇ。

図示しなかったが、このほか多数の剥片・砕片が出土している。原の辻型台形石器製作の初期段階で剥離された砕片は、A群集中部を中心に多数検出されている。これらの砕片は、翼状剥片の小形品と評価することもでき、国府型ナイフ形石器との関連を窺わせる。あまり多くないが、原の辻型台形石器の素材を剥離したものと同じ形態の石核から剥離された剥片が認められる。これらは小形品であること、形状が台形石器製作に適さない、自然面を大きく残すなどの理由で石器に加工されなかったものである。この他、ナイフ形石器や台形石器の調整時生じたブランティング・チップ（A・B群）、彫器の樋状剥離時に形成されたスポール（B群）などが検出されている。

〈引用・参考文献〉

麻生優・白石浩之　1976　「百花台遺跡」『日本の旧石器文化』第3巻（雄山閣）

萩原博文　1977　『長崎県平戸市度島町湯牟田中山遺跡』（平戸市教育委員会）

萩原博文　1983　「原の辻型台形石器について」『麻生優編　人間・遺跡・遺物』（文献出版）

萩原博文　1991　「神の池遺跡Ｂ地点　Ⅱ」『神の池遺跡Ｂ地点Ⅱ・火除遺跡Ⅱ』（神の池遺跡調査会）

萩原博文・加藤有重　1990　『崎瀬遺跡Ⅱ』（崎瀬遺跡調査会）

福岡市教育委員会　2000　『井尻Ｂ遺跡　8　―井尻Ｂ遺跡群第12次調査の報告―』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第645集）

松藤和人編　1994　『百花台東遺跡―雲仙・普賢岳北麓の後期旧石器時代遺跡の調査』（同志社大学文学部考古学調査報告　第8冊）

４．まとめ

１　各石器群の特徴

Ｃ群の石器群は少数に過ぎないが、基部加工ナイフ形石器や縦長剥片が検出されている。縦長剥片は西牟田型石核のような石核から剥離されたと思われる。基部加工ナイフ形石器も堤西牟田第Ⅳ文化（萩原1985a・b）に類似することから、消極的ではあるがナイフ形石器群最終末に所属する可能性がある。

Ｂ群集中部は、百花型台形石器、小形石刃核、小石刃の折断品、削器などが認められる。百花型台形石器は中山形石核と共伴する場合が多いが、神の池遺跡Ｂ地点（萩原1991）では複数の素材生産技術が存在する。逆台形状の小形片側辺加工ナイフ形石器、小形ペン先状の部分加工ナイフ形石器も共伴する可能性がある。百花型台形石器とナイフ形石器の共伴は神の池遺跡Ｂ地点などに認められ、小形ナイフ形石器が出土している。Ｂ群集中部の形成年代は、百花型台形石器の存在からナイフ形石器文化終末期に位置付けられ、Ｃ群とも近い時間関係にあると考えられる。

Ａ群出土資料の大半は原の辻型台形石器の製作に係わるもので、素材制作や細調整の折生じた各種の石片が検出されている。これらは、直径3.5～4ｍの範囲に最も集中しており、狭い空間で素材や石器の製作が行われているのである。削器（コンケイブ・スクレイパー）が共伴することから、道具の製作も行われていたと考えられる。原の辻型台形石器とそれに関連する資料は6点、その素材とすることを目的に剥離された剥片は多数認められ、その内4点は加工痕・使用痕ある剥片である。しかし、典型的な原の辻型の完成品は認められず、失敗品や未製品が確認される。完成品は次のキャンプ地に運ばれたのだろう。石核も1点のみなので、同時に搬出されたようである。

Ａ群を特徴づけるのは、原の辻型制作時の砕片に微調整痕（使用痕）のある小形石器である。このような石器は、百花台東遺跡において多量に検出され、詳細に研究された（鈴木1994、門脇1994）。本石器群でも多量に認められ、一部は台形石器と同じ形状を呈している。原の辻型台形石器制作の初期段階では比較的大形の砕片が剥離され、石器に加工することを目的としていると考えられる。

原の辻型台形石器は、黒曜石との結びつきの強い石器で、西北九州産黒曜石の分布する範囲に認められ、地域固有の石器と言える。これとほぼ同じ時期、南九州や東九州に分布するのは狸谷型ナイフ形石器である。両者は形態的にも類似しており、ＡＴ降灰後の一時期、九州を代表する固有の器種と言える。原の辻型台形石器は短期間存続する器種であるが、ここで完成した幅広剥片剥離技術は、その後も永く継続している。

Ａ群の石器群は、百花台東遺跡（松藤編1994）や入口遺跡Ａ地点（塩塚2002）とともに、原の辻型石器群を代表する資料と言える。入口遺跡を除き、ナイフ形石器や剥片尖頭器などの主体的道具と共伴する場合が多いが、各遺跡で異なっている。

Ｂ3グリッドの石器密集部の外れに、小形ナイフ形石器などの一群が検出されている。これが、原の辻型と共伴するか否かが問題となる。ナイフ形石器との共伴例は、唐津市日ノ出松遺跡（田島1993）などに認められるが、形態的に違いがあるようである。Ｂ3グリッド周辺部には、この他縦長剥片、中山型石核、西牟田型石核などが出土している。これらの石核は、ナイフ形石器群終末期に特徴的に組成され、Ｂ・Ｃ群とほぼ同時期である可能性がある。

本石器群は、ナイフ形石器文化中期の原の辻型台形石器と終末期の石器群で構成されていると考えられる。百花台型台形石器と小形ナイフ形石器の共伴事例は少ないが、ほぼ同時期に存在しているのは明らかである。しかし今回の資料においては、両者の共存を明確にすることは出来ない。

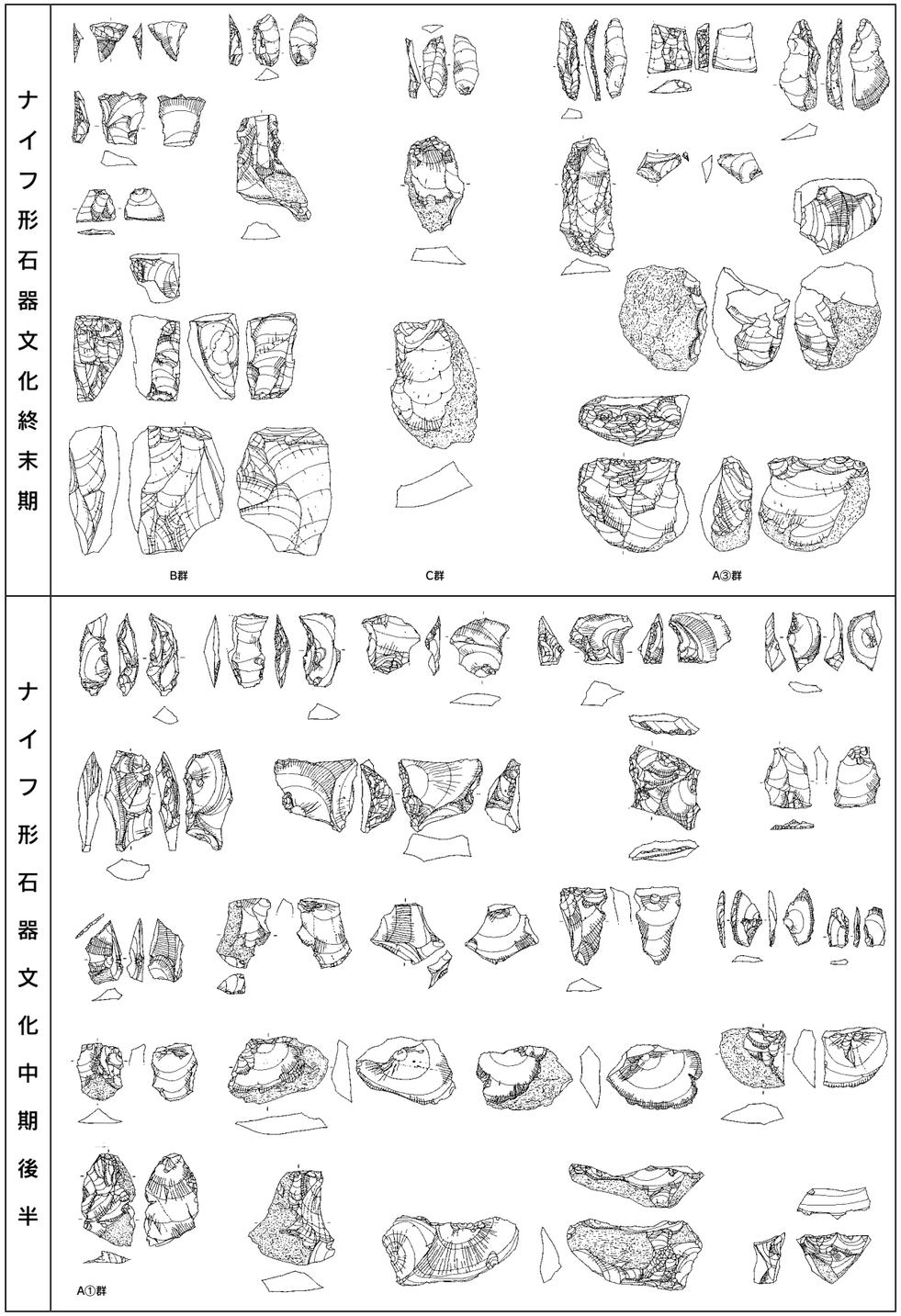


Fig.22　A・B・C群の時間的関係

2　原の辻型台形石器関連資料の分布状況

A群集中部の石器群をさらに理解するため、原の辻型台形石器の代表的遺跡といえる入口遺跡A地点と花台東遺跡を取り上げ、詳細に比較する。

入口遺跡A地点は平戸島の北部に位置し、広範囲で原の辻型関連資料を含む複数時期の石器群が検出されている。原の辻型台形石器は、小形のナイフ形石器、国府型ナイフ形石器、剥片尖頭器、円形刃部掻器などと共伴する可能性が高い。それらの素材は松浦産の黒色黒曜石を主体とするが、現地産のメノウや安山岩も一定量組成されている。

その中でA地点694b区は、ほぼ原の辻型関連資料のみで構成されている。380点出土しているが、その大半は第3aユニット（319点）に分布し（塩塚2002）、その周辺部は疎らに分布している（Fig.23）。石材は大半が松浦産黒曜石であるが、安山岩22点（5.8%）、メノウ13点（3.4%）を僅かに含んでいる。定形石器の大部分は原の辻型台形石器で、製品16点と未製品または失敗品が数点認められる。他の定形石器は、メノウ製小形掻器1点のみである。原の辻型と異なる石器製作システムによるものとして縦長剥片が認められるが、調査区の南部端に分布することから、別の集中分布に属するものと考えられる。

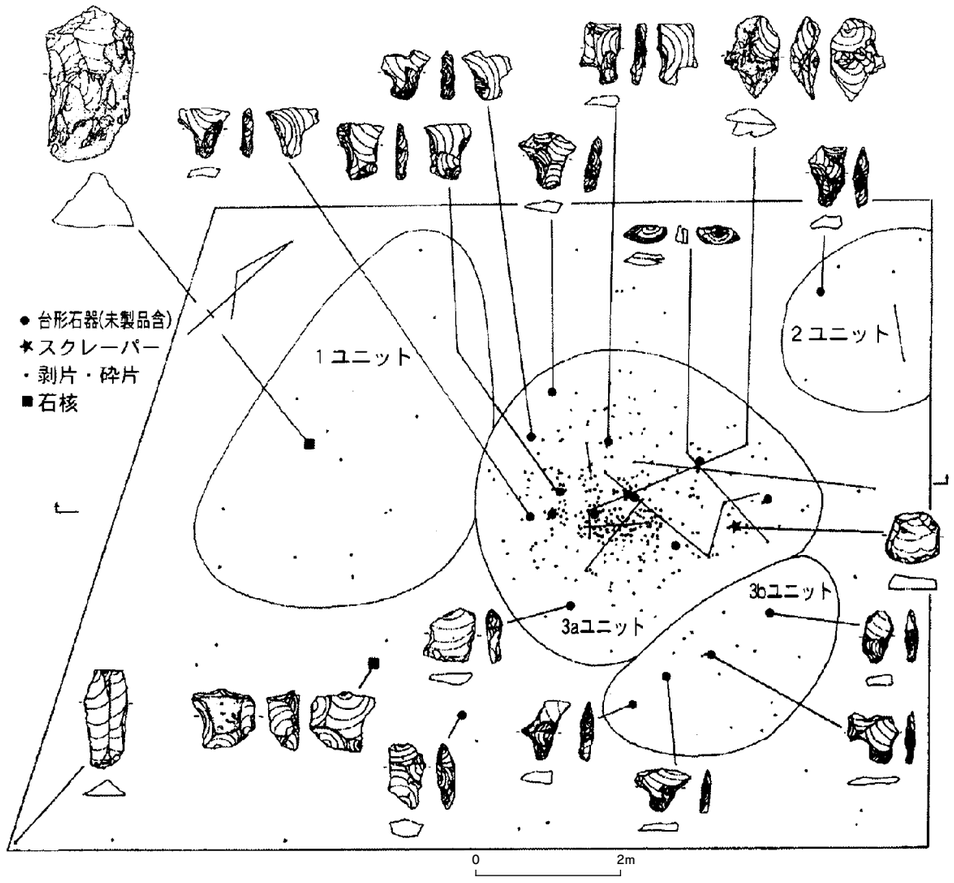


Fig.23　長崎県入口遺跡A地点694b区遺物分布図（萩原2004a）

第3aユニットは剥片・砕片を中心とするが、これらは原の辻型台形石器の素材生産と細調整に係わるものである。原の辻型の素材生産を行った、求心状石核の側面調整に係わるものや砕片の接合例（Fig.23）も認められる。数個の小形原石が持ち込まれ、その分割、石核素材の獲得、原の辻型台形石器の素材剥離、石器素材への細調整、道具製作という一連の作業が行われたと考えられる。ただ残核が集中部になく、素材剥片も少ないことから、一部の工程は他の場所で行われたものと思われる。第3aユニットに安山岩やメノウが一定量組成されていることから、原の辻型のみでなく、他の石器製作との複合も考えられる。この点は、第1ユニットと第3aユニットにレベル差があり、時間差も考えられる。

原の辻型台形石器関連遺物は、第3aユニットを中心にその周辺部に分布している。第3aユニットの中心部に剥片・砕片の密集部が認められることから、ここで石器製作が行われたものと思われる。原の辻型とその未製品は、隣接する第3bユニットに4点、第2ユニットに1点、第3aユニットの南に1点確認され、石核もその近くに位置している。第3aユニット周辺部の第2・3bユニットは剥片・砕片の数が少なく、その一部の工程や道具製作が行われた空間と考えられ、これらは原の辻型に関するほぼ単一のサブシステムによって構成されている。

第3aユニット周辺で検出された原の辻型は、Fig.23のように破損品や失敗品もあるが、完形品も比較的多い。この点は井尻B遺跡第37次と違う点であり、後述の百花台東遺跡とも異なっており、本石器群を特徴づける。このように、製作の場に完成品を供伴する事例は他の遺跡でも確認され、当時の集団行動と関連していると考えられる。

島原半島に位置する百花台遺跡群は、旧石器時代各時期の石器群が大量に発見されている。百花台東遺跡もその一つで、AT上位より原の辻型台形石器や剥片尖頭器を主体とする石器群が検出されている（松藤編1994）。Fig.24のように、石器集中部は（半）環状を呈するが、CⅡ集中部の石器と炭化物集中は他の集中部の約20cm下位より検出されている。しかし、定型石器の形態的特徴は他の石器集中部と同じで、同一個体と考えられる資料が他の集中部にも存在することから、ほぼ同時に形成されたものだろう。

各石器集中部は均質でなく、定形石器の組成、剥片・砕片の数が異なっている。最も多量の石器が検出されたCⅠ集中部は、密集する中心部と周辺部では石器分布の在り方に違いがある。周辺部に剥片尖頭器や掻器の完成品があるのに対し、中心部は原の辻型台形石器関連資料で構成されている。礫レベルで持ち込まれ、素材生産、定形石器製作という一連の工程が行われている（Fig.24）。入口A地点694b区と共通する部分が多いが、原の辻型台形石器は未製品、失敗品と考えられる資料のみで構成される。他のユニットは石器数が少なく、石器製作工程も部分的である。

CⅠ集中部とCⅢ・CⅤ・CⅥ集中部には接合関係が認められ、CⅢ・CⅣ集中部間にも接合例がある（Fig.24）。これに対し、CⅡ・CⅦ・CⅧ集中部は独立的である。炭化物集中や被熱箇所は後者に認められ、性格に違いがあり、作業内容が異なると思われる。CⅠを中心とする集中部は石器製作を中心とする場で、CⅡ・CⅦ・CⅧは休息や炊事を中心とする空間で、炉の近くで石器製作に関する部分的作業が行われていたと推定される。ただ、これらの炭化物集中は礫を伴っておらず、日ノ岳遺跡などの在り方とは異なっている。

原の辻型台形石器の製作に関しては、黒曜石礫が持ち込まれそのほぼ全工程が認められるが、安山岩やシルト質頁岩を素材とする剥片尖頭器は、素材もしくは製品（半製品）レベルで搬入されている。黒曜石素材の原の辻型にも単独搬入品があるが、原の辻型に関するサブシステムが突出し、剥片尖頭器などは細調整など一部の工程のみを行う石器製作システムと捉えることができる。

定型石器は被損品や未製品（失敗品）が多いが、完形品もかなりの割合で組成されている。特にCⅡ集中部は3点の原の辻型完形品、掻器などで構成されており、使用可能な道具を組成しているものと思われる。集団がキャンプを去るとき、基本的には不用品のみを置いて去っていくと考えられるが、回帰を考慮した移動サイクルである場合は、「放置」した道具の再使用が考えられる。

井尻Ｂ遺跡Ａ群を含めた3遺跡は密集部をもつという共通点があり、盛んに石器製作が行われている。百花台東遺跡は（半）環状ユニットを形成するが、井尻Ｂ遺跡Ａ群や入口遺跡Ａ地点は単純に近い分布構造である。これは、百花台東遺跡のみが炭化物集中や被熱箇所が検出されていること、と無関係ではないないだろう。石器製作と同時に日常生活の場であったのであろう。

百花台東遺跡は945点の資料が検出されているが、原の辻型台形石器の製作と深く係わるＣⅠ集中部489点で、井尻Ｂ遺跡Ａ群の456点（この中には小形ナイフ形石器に関する資料を少数含んでいる）に近い出土数である。入口遺跡Ａ地点694b区も出土点数に大きな差はない。これらに共通するのは、密集部の中心で原の辻型台形石器の製作活動が行われている点である。

3遺跡は、石器素材（剥片）剥離、石器（原の辻型台形石器）加工、道具（槍）製作という、共通の作業が行われていたと思われる。井尻Ｂ遺跡は、原の辻型台形石器の初期段階で剥離された特徴的な砕片はＡ群のみに認められ、石器に使用されたものを含め39点が検出されている。急傾斜細調整の細生じたブランティング・チップが、B群にも検出されている点と異なっている。

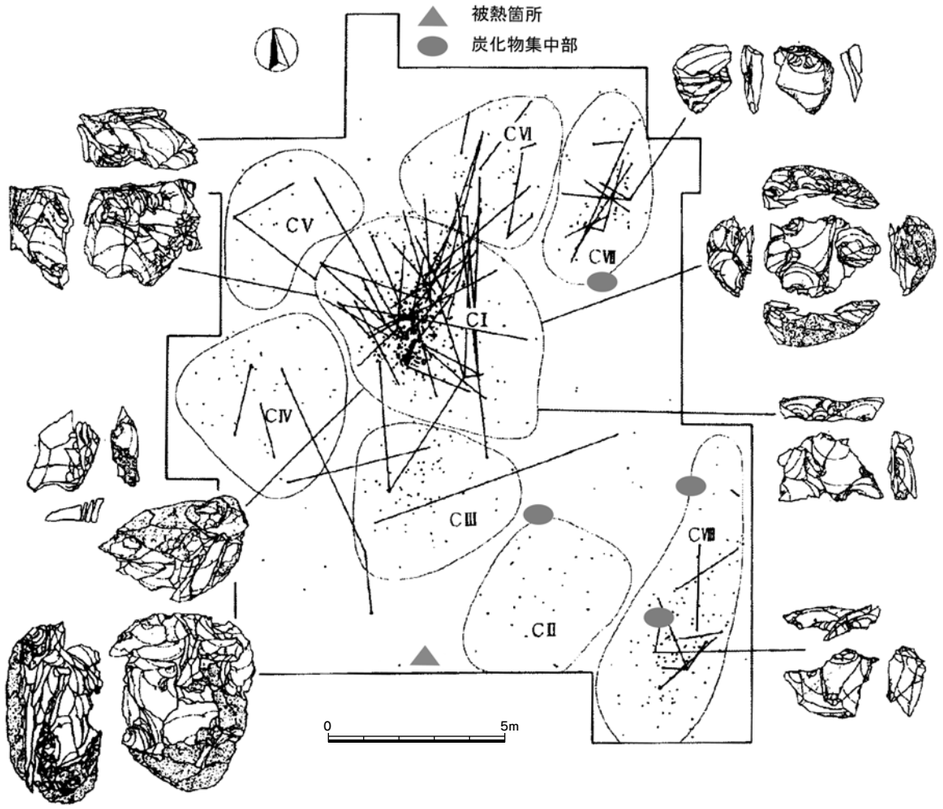


Fig.24　長崎県百花台東遺跡の遺物分布と接合関係（萩原2004a、松藤編1994をもとに作成）

井尻Ｂ遺跡Ａ群はFig.25のように、中央に密集部するA1群と周辺部のA2・A3群で構成される。A2群はペン先状ナイフ形石器、縦長剥片の両端を折断したた使用痕ある剥片などが検出されている。A3群は二側辺加工ナイフ形石器、端部加工ナイフ形石器、不定形の台形石器2点、西牟田型石核などが出土している。中山型石核や片側辺加工ナイフ形石器も、A1群との境界付近で検出されている。原の辻型台形石器関連資料は、A1群を中心にA2・A3群にも少数認められる。

Ａ群における原の辻型台形石器関連資料は、台形石器5点（内1点は調整砕片を素材とする）をはじめ、その素材剥片に使用痕のある例4点、素材剥片6点、初期段階の調整砕片32点、調整砕片に使用痕を施した例6点、石核1点が検出されている。全出土数の1割以上であり、この他にも関連資料があるものと思われる。このように、石器製作の全工程が認められる例は、前述の百花台東遺跡や入口遺跡Ａ地点などに認められ、密集する石器分布が確認されている。地域を超えて、同じような活動の場を形成しているものと思われる。

原の辻型台形石器を含む石器群は、西北九州の黒曜石を主体とする点で共通している。黒曜石産地に最も近い入口遺跡Ａ地点は、安山岩やメノウを一定量含むが、井尻Ｂ遺跡Ａ群は大半が黒曜石で構成される。入口遺跡Ａ地点の近くに安山岩やメノウの原産地があるが、百花台東遺跡は安山岩やシルト質頁岩が遠くから搬入されている。井尻Ｂ遺跡Ａ群も、安山岩などを遠くから得ている。量的に少ないが、石器素材の構造は同じと思われる。

Ａ群は、失敗品、未製品、欠損品のみで構成され、百花台東遺跡ＣⅠ集中部も同様であるが、他の集中部には完成品が認められる。入口遺跡Ａ地点694b区は多数の完成品が含まれており、台形石器の点数も多い。入口遺跡は、他の地点にも原の辻型関連資料が認められ、これらを含めると百花台東遺跡と同じと考えられる。井尻Ｂ遺跡群も、第6・12次資料を含めて考えるべきだろう。

これらの遺跡で掻・削器は周辺部から出土し、石器製作を行う中心部とは場の機能が違う、と考えられる。道具製作や修理は、周辺部において為されていたと思われる。また、百花台東遺跡は密集部からやや離れたＣⅡ・ＣⅦ・ＣⅧ集中部において、炭化物集中部や被熱箇所が認められる。井尻Ｂ遺跡Ａ群は炉址の痕跡は認められないが、かなり離れた位置で磨石が検出されており、この場が炉址に相当する可能性が考えられる。

Ａ群は、遺物密集部（A1群）の周辺部（A3群）に小形ナイフ形石器等が分布し、A2群にペン先状小形ナイフ形石器が検出されている。前述のように、A1群とA3群には時間差が想定されている。A2群はA3群の小形ナイフ形石器と同時期と考えられ、B群・C群も近い時間関係にあると思われる。これに対し、原の辻型台形石器関連資料はA1群とその周辺部（A2・A3群）に分布している。A1群はウワダイラ型や大形台形石器が共伴し、原の辻型台形石器単純でなく、片側辺加工ナイフ形石器も伴う可能性がある。両者の区分を明確に出来ない部分もある。

百花台東遺跡ＣⅡ集中部も、剥片尖頭器や中原型を周辺部に包含している。長崎県西輪久道遺跡下層は、二側辺加工ナイフ形石器や剥片尖頭器と共伴している（副島・伴編1985）。二側辺加工ナイフ形石器は基部にノッチを入れたものである。唐津市日ノ出松遺跡は、総点数2,296点のうち原の辻型台形石器は5点で、その他ナイフ形石器63点、原の辻以外の台形石器４点、剥片尖頭器11点、彫器10点、掻・削器27点、磨石・敲石2点、石核28点が検出されている（田島編1993）。ナイフ形石器は、石刃（縦長剥片）素材の二側辺加工が主体で、片側辺・部分加工ナイフ形石器が認められる。西輪久道遺跡下層も原の辻型台形石器5点より、その他の台形石器4点とナイフ形石器6点の方が多く、原の辻型主体の石器群とはいえない。入口遺跡Ａ地点も、剥片尖頭器や小形ナイフ形石器が原の辻型台形石器分布域の周辺部で確認されている。

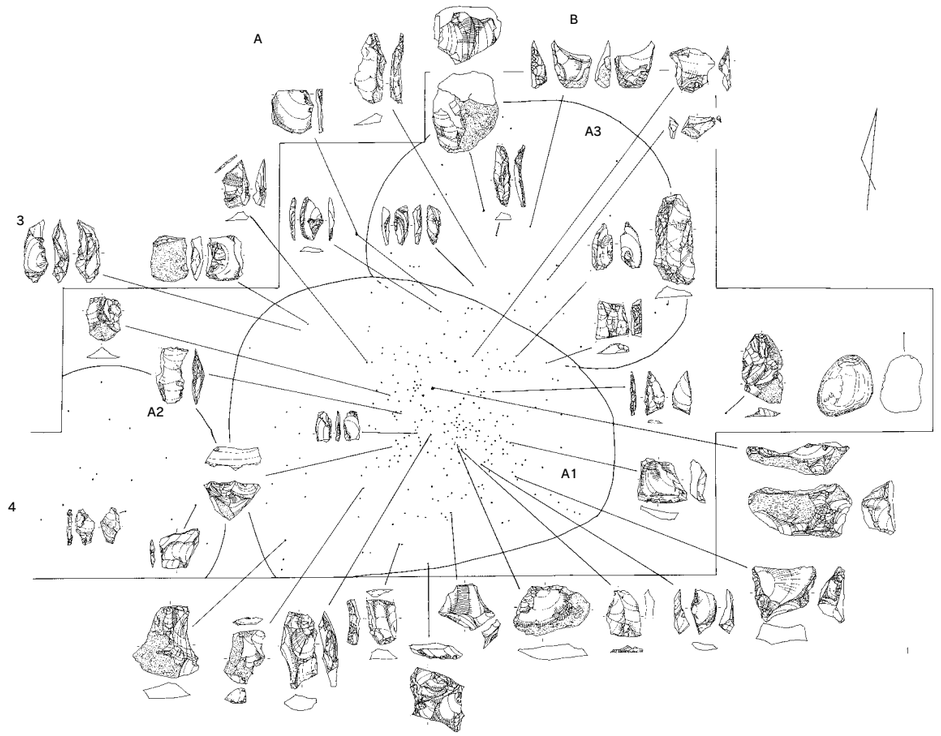


Fig.25　井尻B遺跡第37次Ａ群の遺物分布状況

剥片尖頭器や中原型ナイフ形石器は、原の辻型台形石器と近い時間関係にあり、共伴する可能性は高いと言えよう。共伴事例が多いことも、これを支持していると考えられる。しかし、ナイフ形石器は各遺跡でその形態的特徴が異なっている。素材生産技術も異なると思われ、石核の形態が異なっている。そのため、共伴のナイフ形石器は原の辻型台形石器と時間を異にする可能性が指摘出来るのである。密集部に分布している事例が少ない点も、これを支持すると思われる。

多くの遺跡で、特徴的な掻・削器（コンケイブ・スクレイパー）や角形彫器を組成しており、原の辻型台形石器という個性ある石器を創りだした集団群の保持する技術であると思われる。この中で、鋸歯状の円形刃部掻器は他の石器群にあまり認められない器種である。

３　井尻Ｂ第37次石器群の位置付け

本調査で、原の辻型台形石器や百花型台形石器という個性豊かな石器群が検出された。これらは西北九州の黒曜石と強く結びつき、北部九州を中心とするほぼ同じ地域に長期間認められる。ナイフ形石器文化の数千年間、台形石器の形態こそ変化するものの、同じ石材を素材とする石器群が継続して認められるのである（萩原2004b）。素材生産技術も変化するが、いずれも西北九州の黒曜石の形状を良く生かしたものである。

本資料は、福岡平野もその文化圏に属していることを示している。福岡平野は石器素材となる原石に乏しく、最も近い原産地である西北九州の黒曜石（腰岳・松浦・針尾島）を採取していたのだろう。その過程で石器製作技術が学習され、広い地域に分布しているのである。離れた地域においては、集団行

動連鎖により学習されたと考えられる。A群遺物密集部のあり方も西北九州と類似しており、その製作過程を含め集団行動レベルで一致しているものと思われる。中央の密集部で素材生産や石器製作が行われ、周辺部や離れた場所で道具製作や日常生活が営まれ、石器製作のみならず、地域集団の行動パターンも同じなのである。

原の辻型台形石器製作の初期段階で生じた砕片は、国府型ナイフ形石器の素材である翼状剥片の剥離手法と類似しており、何らかの影響を受けているものと思われる。西北九州の黒曜石産地では、典型的な国府型ナイフ形石器はほとんど出土せず、福岡平野など周辺部を根拠とする集団が接触し学習したものと考えられる。国府系石器群の拡散期は、九州（特に東九州）もその影響を受けたのは明らかで、国府型ナイフ形石器や横長剥片石核が広く認められる。原の辻型台形石器もほぼ同時期に展開しており、地域集団間交流連鎖により製作技術を学んだと考えられる。

ナイフ形石器文化終末期には、広い範囲で小形台形石器が認められる。南九州の例は百花台型台形石器のカテゴリーに含まれないが、福岡平野には典型例が検出されている。西九州の南北では、石器製作の伝統に違いが認められるのである。南九州石器群は、石器製作に対する規制がやや緩いのである。この伝統は細石器文化においても継続しているのである。このように福岡平野は、阿蘇地域や宇部台地などと共に、西北九州の黒曜石とそれに基づく石器製作技術の影響を受けている地域と言えよう。旧石器時代は石器石材の存在が大きく、食料などと共に地域集団の行動を決定しているのである。

本調査において、百花台型台形石器と小形ナイフ形石器の共存が想定された。西北九州では両者の共存は認められず、時間差である可能性も考慮されていた。本遺跡の事例によって明確に共伴するとは言えないが、その可能性を高くしたのは間違いないであろう。

引用・参考文献

門脇秀典　2002　「百花台東遺跡のブランティング・チップについて」『百花台東遺跡―雲仙・普賢岳北麓の後期旧石器時代遺跡の調査』（同志社大学文学部考古学調査報告　第8冊）

塩塚浩一　2002　「入口遺跡694地区発掘調査」『平戸市史研究』第7号

鈴木康二　1994　「百花台東遺跡出土の微細剥離を有する剥片の検討」『百花台東遺跡―雲仙・普賢岳北麓の後期旧石器時代遺跡の調査』（同志社大学文学部考古学調査報告　第8冊）

副島和明・伴耕一郎編　1985　『諫早中核工業団地に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ』（長崎県文化財調査報告書　第74集）

田島龍太編　1993　『日ノ出松遺跡』（唐津市文化財調査報告　第55集）

萩原博文　1991　『神の池遺跡Ｂ地点Ⅱ・火除遺跡Ⅱ』（神の池遺跡調査会）

萩原博文　2004a　「入口Ｂ地点の石器分布と旧石器時代のキャンプに関する予察―集団の組織や社会構造の解明へ向けて―」『平戸市史研究』第10号

萩原博文　2004b　「ナイフ形石器文化後半期の集団領域―西北九州を中心に―」『考古学研究』第５１巻第2号

萩原博文編　1985a　『堤西牟田遺跡』（平戸市教育委員会）

萩原博文編　1985b　『西中山遺跡・堤西牟田遺跡Ⅱ・平戸城跡緊急発掘調査報告書』（平戸市教育委員会）

松藤和人編　1994　『百花台東遺跡―雲仙・普賢岳北麓の後期旧石器時代遺跡の調査』（同志社大学文学部考古学調査報告　第8冊）

１　調査区全景（北より）

２　調査区南壁土層①（北より）

３　調査区南壁土層②（北より）

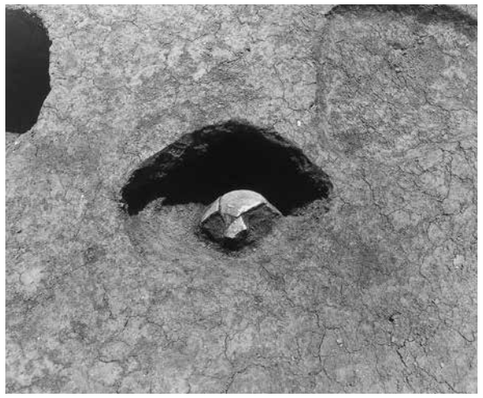
４　SD18（北より）

５　SD18土層（南より）

６　SD15（西より）

7　SD33（南より）

8　SP11遺物出土状況（南より）



9　SP13遺物出土状況（北より）

10　出土遺物①（Fig.7-8）

11　出土遺物②（Fig.7-9）

12　出土遺物③（Fig.12-4）

報　告　書　抄　録

ふりがな	いじりびーいせき
書　名	井尻Ｂ遺跡　23
副書名	第37次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1218集
編著者名	阿部　泰之・萩原　博文
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810－8622　福岡市中央区天神一丁目8番1号　℡（092）711－4667
発行年月日	平成26年3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
井尻（いじり）Ｂ遺跡 第37次	福岡市南区井尻（ふくおかしみなみくいじり）4丁目174番・174番2	40130	0843	33°33′0″	130°26′34″	2012･4･17～ 2012･7･12	607.8㎡	共同住宅 建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井尻Ｂ遺跡	集落	旧石器 奈良	溝・旧石器ユニット	須恵器・瓦・旧石器	旧石器時代遺物

要　約

今回の調査では奈良時代の溝とともに市内でも稀有な旧石器時代遺物のまとまった出土をみた。調査区ではロームの上に黒色のいわゆるクロボク層の残存が認められ、過去の削平が少なかったことがわかる。加えて調査地北側で実施された発掘調査で検出されている弥生後期～古墳前期の住居址が検出されないため、集落の南限は本調査区に達していず、結果として旧石器時代遺物が良好に遺存したのであろう。

井尻Ｂ遺跡　23
—第37次発掘調査報告書—
福岡市埋蔵文化財発掘調査報告 第1218集

平成 25 年 3 月 24 日

発　行　　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８番１号

印　刷　　國崎美峰堂
福岡市東区箱崎１丁目20－５